

328-179

尾池宜卿講述

支那文學講話

孫子

東京昭文堂藏版

明治  
43. 3. 1  
丙交

壽正

印

明治己酉暮日

生白翁書

印

印

支那文學講話序

丈夫由來窮處多し、已むなくむば窮愁之簡に汗して、屢  
と空しきに補ひ、以て其の時を待てる也。予れ志を抱い  
て陋巷に在り、固より齊楚燕趙の士たるを欲せず、東郭  
播間の才子たるを爲さず。願ふところは鄒魯の士にして  
世の以て迂遠にして事情に關なりとするところの者。窮  
厲頻りに襲ふて、之れを拒ぐに由なき、噫又た其の分こ  
いふべき乎、果して然らば茲に窮愁の簡に汗して之れを  
芻米僕賃に代ふ、亦た可ならずや。書房昭文堂主人と計

つて此の支那文學講話あるもの、之れを天下に布いて、  
大は以て、社會を利し、小は以て個人を益するか如き、  
毛頭冀ふところにあらざるなり。然らば亦た孟浪杜撰の  
ものかと問はゞ斷乎として否と答へむ、是れを嚼むで之  
れを口中に入るゝが如く、反覆丁寧の筆致を以てし、し  
かも繁に流れず簡に失せず、偏に初學少年の解し易きに  
力めたり。屬者、青年子弟西洋文學に陷溺して、漢籍に  
其の力を失ひ、漸く醒め來たつて之れを學ばむと欲する  
あるも、顧みて師を選べば、師は老ひたり、書を索むれ

ば書は古りたり、是れ彼岸に達せむとして、走つて江濱  
に至り、舟に乗じて始めて楫なきに望みを失ひたると同  
じ、歸らむか舟、岸を放れたり、濟らむか楫、無きを如  
何せむ。遂に江河に泛むで水の流るゝに流れるあるのみ。  
是の如きは即ち漢籍の力を欲して漢籍の力を得るに困せ  
る。今の青年子弟にあらずや。是の時に當たりて此の支  
那文學講話を出だせば、青年子弟は争ふて以て之れを楫  
とせむも、其は予れに在つては望外の幸のみ。但だ主人  
以て利し、予れ以て食する。是れ眞個の願ひ也。大高子

葉にあらざるも、似合ひましたかエへへのへ。夫れ齊と  
梁とに説かざるも、久しく筆を辯囿に絶ちたり、茲に復  
び出で、隔世の感なからむや。乃ち綴つて以て序と爲す

明治四十三年一月一日

宜 卿誌

### 孫子序

茅元儀が孫子より以前の書意は孫子に遺さず、孫子より  
以後の書は孫子を置くこと能はずといへる如く、孫子は  
兵經として不朽であるが、亦た文章としても不朽である。  
物茂卿は軍書の内にて孫子ほど文の奇妙なる書は外にな  
し、歴代の文人が是れを稱美するけれども、しかし孫武  
が文章を嗜みて書いたのではない、其の道理の妙處を得  
たから、中に翔ちて外に彪はる、道理で自然と其の文章  
が他に勝れたのであると曰ひ、頼襄は莊は虚を用ふるに

妙左は實を用ふるに妙、之れを兼ねるものは孫子の論兵  
なり。と曰ふて居るが、誠に其の文は簡古老蒼で、しか  
も文法森嚴なる處、易も論語も及ばない。是れ不朽なら  
ずして何ぞ。予今之れを講述して初學少年に與ふるも其  
の文の妙を味はしめむとするもので、格別兵法家氣取つ  
ての仕事ではない。故に陸海の大將に讀ませ、大學の博  
士に教えやうなどの料簡は少しもない。しかし彼れ等に  
して一讀すれば、亦た予の見に發明するところの一ツや  
二ツないでもなからうと信ずる。

二百八十年前の關ヶ原合戦の當日たる明治四十二年九月一日

宜 卿 識

### 凡例

一。孫子の本文は今版のもの、誤字が甚だ多い。故に予は古本に據つて、校訂した。本書が今版のもの、即ち七書なごり相違の文字あるは、是れが爲ぞ知るべし。

一。訓點も出來得るかぎり、我が國語の正格に合はせやうとしたが思はしくは出來なかつた。但し從來のものよりは一層の進境あることを自ら吹聴するに躊躇しない。

一。本講は現代の言葉で講ずるものであるから、本文の名詞は當代の名詞に代へて述べて居いたところもある。將を總司令官と見たるなどは其の一例である。蓋しなごり易からしめやうとの意に

出来ものな。

一、古業のうちで、孫子とらる。判讀に至難な文は莫い。故に流布の書多くは古人の解を踏襲して、お茶を濁して居るのである。予故に一家の見を立て、講ずるに當り専ら至易の言を以てするに心めたるつもりである。

二、斯書を読む者は、先づ本文のみを通讀誦記し、而かる後講解の文のみを精讀玩索し、更に兩者を交々熟讀するがよい、かくすれば妙味と旨意とを得られる。

## 目次

### 第一本 前記

第一章 孫武及び其の時代……………一

第二章 孫武と孫子……………九

第三章 孫子と類書……………一四

### 第二本 孫子

始計第一……………一九

作戰第二……………五〇

謀攻第三……………六四

軍形第四……………七九



兵勢第五	九八
虛實第六	一一四
軍爭第七	一三五
九變第八	一五八
行軍第九	一七〇
地形第十	二〇二
九地第十一	二二四
火攻第十二	二六一
用間第十三	二七〇
目次了	

支那文學  
孫子

尾池宜卿述

第一本 前記

第一章 孫武及び其の時代

地球は宇宙の觀覽車である。一分間に約四百里、一時間に二萬四千里、一晝夜に五十七萬六千里の大速力を以て終始かはらず、其の軌道を公轉して居る。此の觀覽車の前にあつては、ツエツペリンもラタムも顔色なしだ。かゝる絶快絶奇の觀覽車で宇宙を觀覽しつつある人類は此の至樂を忘却して、小は夫婦喧嘩より、大は國家の争闘に惟れ日も足らぬ有様であるが、誠に斯く考へ來たらば、識者の目には戦争なども兒戯

第一本 第一章 孫武及び其の時代

の観覧車の上  
を思ひ出  
されても



其の兵法を以て試験が出来まいか、と下問した。孫武は言下にわけもないことと答へると答へた。呉王は然らば婦人で以て其の試験が出来まいか、と復た下問した。武孫は即座に出来ぬだんではござらぬ、と答へて、呉王の寵妾愛姫を百八十人かりうけて其の庭前で試験した。時に其の美人を二隊に分けて、寵姫二人を其の隊長にして、孫武自身は大將で美人の右手に戟を持たせ、孫武が茲に命令していふには、汝等全隊の者、汝等の心と汝等の左右の手と背中とを知つて居るか、美人等之れを聞いて知つておりますと答へた。孫武更に命令して、汝等よく汝等の前は、汝等の心で心を見、左は其の左の手を見、右は其の右の手を見、後は其の背中を見て居れと告げた美人一齊によろしいと承知した。孫武はこゝに命令が出来たので、いざと鼓を鳴らして號令をかける、美人等、おかしくなつて大笑したが孫武は號令の達しないのは、大將たるもの、罪であると自身を責めて、又た鼓を鳴らして號令すると、美人等復たもや、大笑したので、號令が達しないのは大將の罪であるが號令が達しても之れを遊つて、軍

四

法どほりにせぬのは是れは隊長の罪といふものであるとて、寵姫二人を斬つてすてやうとした處が、呉王はこりや大變先づ待つて呉れ、其の二人の美人は寡人の最も大切にして居るもので、今斬られては、今晚から飯も甘く食ふ氣になれぬ。どうか斬ることはやめにして呉れとたのむばかりに、申し聞けたが、孫武はさるもの、なか／＼に聞き入れない、臣は既に君命を受けて、大將となつて居るものである。大將たるものは、戰場にあるときは、君命を受けないことがあるのでござる、といやおうなしに二美人を斬罪に處して、之れを示し、そして其の次の美人を隊長にして、號令をかける。今度は美人等笑ひどころでない。こわい大將だと皆々號令のまゝに動いたので、孫武大に喜びで、是れ此の通りでござる、早速御覽になるやうにと呉王へ使を出したが、是れより先きに呉王は二美人を斬られたために観るのをやめて、奥に這入つて居て、使の者には最うやめるがよい、寡人は観るのまいやだ、と頭を振つて下つて來ない。孫武は之を聞いて、王様は徒らに言ふことを好むで、實際の用の出來ない人であると歎息したが、

六  
肝入りの伍子胥は此の間を取りなしたと見えて、吳主は孫武を用ひて大將とし、當時の強國たる楚を破り、又た齊晋の大國を威しつけて、吳の國が其の名を天下に知らるゝことになつたが、是れには孫武が大に與つて力ありといふべきだ。此の事は史記の記するところで以上は予が史記を主としてとり、其の他の書を參考して筆したものである。孫武は斯の如く能く言ふて能く行ふたものであるが、其後孫武は、吳王は到底天下に大事を爲すの君でないこととつて、高踏勇退して行くところを知らない。復たび齊に歸つたといふものあれども、其の墓は吳縣を去る十里の處に在ると越絶書には書いてあるやうなわけである。是れに由つて觀るときは、孫武は當に武名あるばかりでない。彼れは兵法家で戦争も上手な人であつたといふばかりのものでもない。多少の識見もあつたものらしい。李衛公は彼れを評して、張良、范蠡、孫武の若きは脱然として高く引いて往く所を知らず、此れ道を知るものにあらずむば、安むぞ能く爾らむ乎。といつて歎賞して居る。武道を知れるばかりでなく、人生、世に處するの道を知れるもの

であるといふことだ。誠に李衛公のいふ通りであらう。孫武去つて後闔閭も既に死し子胥は暗君の夫差に殺され、夫差は自害して、吳は永へに越に滅ぼされてしまつた。孫武の時代も過ぎて戰國となり、其の亂世には、學者豪傑各地にあらはれて、口舌を以て諸侯に説き、劍を以て諸侯に招かれ、世は麻の如く亂れたる中に齊に孫臏といへる、能く言ふて能く行ふものがあつたが、是れぞ孫武が後の世の孫であるといふことである。然れども世は亂れに亂れた末に遂に暴秦の天下となつて、復た春秋戰國の如きを見ることが出来なくなつた。

春秋戰國に觀兵式を舉行すること斯の如くし、何を其の速かなる。蓋し車は一分間四百里、速かならざるを得ないではないか。

君不見吳王宮閣臨江起。不卷珠簾見江水。曉氣晴  
來雙闕間。潮勢夜落千門裏。句踐城中非舊春。  
姑蘇臺下起黃塵。祗今惟有西江月。曾照吳王宮  
裏人。衛萬

## 第二章 孫武と孫子

孫武が著はすところの孫子十三篇に就いては、古來異論ありて、また其の定論を見ない。通典、太平御覽、文選註、鄭註周禮等には、孫子の語句あれども、現在の孫子に全然見えないものがあり、語句の聊か違ふものもある。潜夫論、戰國策、淮南子等には、語句の全然相違せると亦た順據したることの明かなると全然同じであるところがある。戰國策の孫臆の言は全然同じである。斯の如き有様なる上に、左傳にも其の傳を載せないから、或は其の人なしといひ、或は春秋の末戰國の初めに山林處士の書いたものだといひ、又た或は古書であるかも知れないけれども、果して何の時代の人であるか知れないと暗に疑ひをはさむで居る者が少くない。然れども予は其の文章の蒼古たるを見ては、到底後人の企畫し得べからざるものと斷言するに躊躇しない、其の人なしといふが如きは論にならぬ。諸書に引用するところの語句の相違は必ずや誤寫より來

葉適、陳振孫の類



て之れを度るに越人の兵云々の語が出たものであらう。居るところがところ故、所謂氣移りの文句であらうと思はるゝのである。若し左なくして吳王に求むる爲に最初より其の積りて居て書いたならば、今少し吳越の事をいひ、或は吳對諸國の事に取つて明々地に論じて吳王を喜ばすやうにしたであらうと思ふ。是の故に予は十三篇を吳王に求め、或は吳の爲に書いたものとは信じない。偶々吳に遊ぶで閑なるまゝに書いたものを、伍子胥等が見て以て得易からざるものとなし、之れを請うて吳王に見せ、且つ伍子胥が更に肝入りして客卿にすることにしたものであるといふ方が穩當の見である、と予は予自らかくいふてかく信するものである。猶ほ孫武が兵法は、決して全然孫武獨創のものでないといふことを知らねばならぬ。それは孫武以前に黃帝や、太公望や其の外有名無名の兵法家が少くはなかつたのである。孫武が故曰の前置をして古語を引用して居ることは本文を見れば直にわかり、且つ本文に黃帝の四帝に勝てる所以といふがあれば、黃帝の兵法をも參酌したものである。故に彼れが全然獨創に出で

支那大文  
學史著者  
鄭氏彼  
兒氏黃帝  
れ亦祖  
を祖迷  
るもの  
るべし  
いるへり

たものとはいへない。さりとて直に黃帝を祖述したものは是れ又た早計である。要するに彼れは古來の兵書に由つて研究して一家を爲したものである。

眼光徹乎紙背。眼視其人。耳聞其言。

在讀書之用意於虛心焉。黃宏

### 第三章 孫子と類書

孫子が兵家、文人、學者に尊重されると同時に、之れに註解を試みるものが甚だ多く、魏武の所謂百家に及べる次第である。しかし其の類書は百家に及べるが故多數でなくてはならぬ筈であるのに、類書はさほど多くは存して居ない。魏武の註が古註として貴ばれ、甚だ古きにかゝはらず今日尙ほ存するけれども、百家の註にして存するは極めて少く諸書載するところの目録で見るときは、今は三分の一もないといはるゝくらゐである。悉しくは十家註中の孫子絞録を見よ。予は今予が見たるものゝみを、左に記して讀者の参考に供しやう。

▲孫子魏武帝註 魏の武帝曹操の註は世人多く知る處、但だ其の註解のあまりに簡に失して常人の讀誦に苦しむ處である、此の書廣漢魏叢書の内にもあり又た我が國にて徳川時代に校訂翻刻したるがある。廣漢魏叢書の内には、孫星衍の校訂せる

もので、比較的信を措いて見るに足るものである。

▲孫子參内 李卓吾叢書の内には、卓吾の撰するところであるが序に孫武子を讀むで、魏武の註を以て精當となし、又た六書を參考して以て其の變を盡して復た各篇の後に論着すとある通り、所謂七書の内六書及び魏武註を各篇の下に集めたものである。

▲孫子明解 鄭二陽が魏武の古註を幽眇にして、悟入し易からずとし、註解を試みたるものであるが、趙之琰は之れに序して、先生、易を以て易を説き、孫子をもつて孫子を解かず、詳らかに經傳子史、天文、奇遁、三教、九流の諸書を引いて皆鑿々根據あり、未だ到らざる所を發らき、言はむと欲するところを暢べ、且つ其の指示精確なれば即ち尺幅の間隠々無形の金湯、不窮の丁甲あり、是の解は明解にあらず、乃ち精解也と提灯をもつて居るが、要するに讀み易き書たるは勿論なれど所謂玄なるものを捉へ來たりて之れが註に入れたるところなきにあらずだ。即ち易などを



引き來たりて註するところはを解かも知れぬが孫武はそれほどの用意をもつて書いたものでなからうから、予は之れを取らぬ。しかし之れ等玄晦の註を取り去らば亦た參考とするに足るものなり。

▲孫子十家註 此の書は孫星衍吳人驥の校訂せるもので、十家即ち曹公（魏武帝曹操）、孟氏、李筌、杜牧、陳暉、賈林、梅聖俞、王哲、何氏、張預の註を本文の毎句に引き來たりて、なか／＼に賑はしきものであるが従つて撰者は別に一家言を立てないけれども讀者には爲に却つて判讀に都合よき書である。我が國では徳川幕府の官版があつて、版木甚だ立派であるが、其の訓點者は何人であるか記名してない、それは別として此の官版は訓點が甚だ粗漏で、誤りが少くない。

▲孫子評註 此の書は吉田松蔭が漢文にて簡單に評註をなしたものであるが、註はさまでのものでなければ、評に至りては松蔭一流の筆法でなか／＼に面白く讀まれるものである。

▲孫子國字解 自ら一代の識見家を以て居つた荻生徂徠の講解したもので、博學なる彼れが講解は能く初學者をして辛い處に手のとやくやうに讀ませる書である。特に假名まじりは讀むに骨折れざるを以て、讀書子の必ず一讀すべきものである。

▲孫子兵法擇同副言 此の書は新井白石が漢文で筆したるものであるが、格別識見の見るべきなきものであるけれども、又た一讀して損のなきものであらう。

▲孫子副詮 是れは佐藤一齊の撰であるが、本文に副文して、通俗にしたるものなれども、其の副文は主として直解開宗などに由れるが見えて自個の見とてはなきやうである。たゞ讀み易きだけ取り柄である。

右の外孫子折衷、孫子讀本、孫子提要、孫子童觀抄等の單行本があるが、皆なさまでのものとは思はれない、林羅山の孫子諺解、孫子摘語、林鷲峯の和漢軍談、山鹿素行の孫子句讀、孫子口義があり、又た武徳大全、武備誌等に合編したるがあり、群書治要、長恩書室叢書、百子全書、經典餘師等の内に入れたるがあり、龍頭七書、七書彙解、七書講

義等に入れたるがあり、尙ほ更に例の素行の七書註義がある。是れは山鹿一流の解釋で面白く讀まれ、又た假名まじりの解義故讀了に困難ならず、徂徠の國字解と此の書とは我が國の學者の註解中で出色のものであらう。當代の書では支那文學全書の内に小宮山綏の孫子講義、普通學講義全書の内の服部誠一の孫子講義其の外二三ある。感心するほどのものではないけれども初學の徒の參考にはならう。尙ほ兵垣四編、秘書七種、諸子品節、同別本、登壇正鶴、武書大全等の内に備本あれども他は未だ一見しないのである。

盡信書則不知無書 孟子

## 第二本 孫子

### 始計第一

吉田松陰曰。先師陰用。始計。已。知。彼。天。軍。之。放。領。之。事。不。外。作。戰。此。攻。可。謀。攻。之。形。通。實。形。勢。申。實。形。勢。一。變。申。實。地。

計は初算  
等子曰計  
先定於  
内。而後  
兵出境

戰爭をするには、先づ彼我の形勢を明かにして、之れに由つて算勘して取りかゝることが肝腎である。即ち敵の國家は今ドンナ有様であらうか。豫算がウマク出来て、財源は豊富であらうか、但しは其の反對であらうか、何處の國と同盟し、何處の國とは反目して居るとか、現在は孤立であるが一たび我れと戦つて我れに於て勝たうものなら、必ず彼れを救援する國が出来てこようとか、其國民は天皇或は大統領乃至國王と政府と所謂上下一致で親ひで居るか否か、農業が盛むであるか、工業はドウであらう。一般國民經濟はドウなつて居るとか、國民は其國がドウいふ地勢に位置して居るから、如何なる氣風であるとか、軍人は士風が盛むに行はれて強いのか、



のないところの形勢事情を探がし求めるのである。之れを爲せば、始めて廟算が立つといふものだ。

一曰。道。二曰。天。三曰。地。四曰。將。五曰。法。

上に述べたところの五事のこと、いふのは何であるかといふに、それは外でもない一が道で、二が天で、三が地で、四は將、五は法といふ順序だ。

道者。令民與上同意可與之生而不畏危也。

五事の一から説明すれば、一の道といふのは、大將たるもの、取るべき奥義である此の奥義を知り得て、兵士兵卒を縦横自在に操り、上將が討死しやうものなら、自分も後れては居らず、直に討死する、ツマリ體は異なつて居ても、心が同じで、大將が命令は自分の心が自分の手足を動かすと同様に觀念して自分の身心を以て其命令を奉じて行ふやうにさして、死するも與にし、生くるも與にし、如何に危難の場合に遭遇しても少しも險呑であると思はさないやうにする、是れが五事の一の道と

いふものである。

天者。陰陽。寒暑。時制也。

二の天といふのは、之れを悉しくいふと、陰陽とて曆の五行の相生相尅や、寒暑とて冬季の寒いときと、夏の暑いときや、時制とて彼の陰陽寒暑に對する用意等である。

地者。遠近。險易。廣狹。死生也。

三の地といふのは、地の利といふことであつて、其の地形には、緩々押しかくべき遠いところ、と急速に襲撃すべき近いところ、と歩兵を用ふべき難處と騎馬を用ふべき平地と、大軍を以て對すべき廣闊な場所と、小勢で突撃すべき狹隘な場所と、それから退きもならず進みもならず、絶體絶命、死を堵して闘はねばならぬ死地と命は安全で、唯だ守つて居りさへすればよい生地と、八ツの辨ふべき區別がある。

將者。智。信。仁。勇。嚴也。

智は智慧  
信は信用  
仁は慈惠

勇は威儀  
日下元今  
親ら大令  
帥司令官  
に於ては  
出外へは  
は兵の時  
は司令官  
のいふ一  
部のあり  
るのみか  
るの司官  
の令に官  
の下の官  
必すある  
官が是れ  
明するは  
こそない

四の將といふのは、云ふまでもなく、大將、即ち總司令官のことであつて、大將たるの器に缺ぐべからざることが五ツある。先づ智とて部下乃至敵の心情を洞察して機敏に策略を運ぐらし、信とて軍令の上で賞すべきものがあつたら、一兵卒たりとも、之れを觀過せずして、必ず賞してやり、又た罰すべきは如何なる者をも問はず遠慮會釋をせずして、必す賞してやり、又た罰すべきは如何なる者をも問はずく厚き慈愛を以て士卒をいたはり、之れを見ることが子の如くし、其の士卒が故郷に遺したる妻子の上に同情の涙を掬み、又た敵の士卒の捕虜となれるものや、其の敵地或は戰地に於ける農民や商人の不幸なる心情を察してやつて出来る限りの便宜を取つて以て、戰爭から生ずる損害を減じてやるの心がけがあり。其次には勇とて山なす大軍が進み來たるも、雲霞の如き大軍が十重廿重に圍むとも、泰然として、動かざること山の如く、靜かなること林の如く、從容として應戰するの氣力があり更に又た嚴といふて威嚴を以て軍令を遵り、士卒をして之れに對して秋霜の威あら

しむる必要がある。大將の器に具はるものは、此の智、信、仁、勇、嚴の五徳とす。若し之れ無きときは眞の大將とはいへない。

法者。曲制。官道。主用也。

五の法といふのは、曲制と官道と主用の三ツであつて、曲制は砲隊銃隊騎兵隊から樂隊等の編制をいひ、官道は司令官旅團長大隊中隊長から下士に至るまで各々の役目に對して取るべき道をいひ、主用とは軍器糧食等兵站部の仕事をいふが、此の三ツを合して法といひ、大將たるものは必ず心して之れを用ひなければならぬ五事の中の最後の二ツである。

凡此五者。將莫不聞。知之者勝。不知者不勝。

五事の説明は上の如くにして、總べて此の五事なるものは、苟も大將ともならうものならば、之れを聞いて居らぬといふことはない。故に之れを聞いてそして之れを知れる者即ち覺つて體得し且つ自在に運用の出来るものは、百戰百勝で、若しも之

二六  
れを聞いては居れど覺りのない大將がありとすると其大將は大抵敗軍するのである。

故校之以計。而索其情。

それであるから、ことさらに前にもいふ通り五事を以て計算して國情を求むるの必要があるのだ。

能は器量  
練は訓練

曰。主孰有道。將孰有能。天地孰得。法令孰行。兵衆孰強。士卒孰練。賞罰孰明。吾以此知勝負矣。

國情を求むることに付いて、尙ほ管々しく云へば、戰爭するに當りて、總司令官となりて出かけ、又た迎ふる處の敵味方双方の國主の、どちらが五事の一たる肝腎の道を體して居るだらうか、次ぎには、軍團長即ち司令官など大將株の連中は双方くらべて、どちらが五事を體して將たるの器量を具へて居るだらうか、次ぎには、天の利や地の利は双方くらべてどちらが自然に得て勝つて居るだらうか、又た次ぎに

は軍法は先方を當方とどちらが克く實行されて居るだらうか、兵隊はどちらが強か  
らうか、士官兵卒はどちらが良く訓練されて居るだらうか、軍法に照らして、賞す  
るものは必ず賞し罰するものは假借なく罰して法の威嚴を示すことどちらが能く勵  
行されて居るだらうか、といふことである。以上管々しく言ふたところのことを以  
て、吾れは確かに其の勝負を判断することが出来るのである。

將。聽吾計用之必勝。留之。將。不聽吾計用之必敗。去之  
されば將官たるものは、吾れの上に云ふところの五事に由つて計算することを聞き  
入れてそして此の計算を採用して戰爭するときは、戰爭は必ず勝ちである、故に之  
れを意に留めて置きたまへ。しかし將官にして、若しも之れを聞いてそして採用し  
て戰爭せぬときは、其の戰爭は遺憾ながら、屹度敗けてしまうから、寧ろ始めから  
此の計算を棄てるが可い。有つても益ないことである。

計利以聽乃爲之勢以佐其外。

然るに吾が言を聽いて五事を計算して廟議を決し、そして勝利の見込みがついたならば、廟議の見込みのみで外に足らぬ處の少しはありとも、之れは機先を制する兵の勢といふもので助けてゆける。

機は機變

勢者因利而制其權也。

それならば、其の勢といふものは、どんなものであるかと當然、質問が起るであらうが、其の勢といふのは、自然に生じ來たる力であつて、此れが形にあらはるゝのは機に臨むで、變に應じたときである。即ち吾れの利たると敵の利たるとを問はず其の間に彼我に生じたる利害に處して、逸早く機變を制するの策略に出で、勝つことである。

陰は詐

兵者。詭道也。

上に管々しく説明したる通り、戦争は五事を以て廟算を立て、又た戰場に於て機變を制するが肝腎であるが、それはさておき、元來兵を用ふるの秘訣は詐りを爲すに

在るのだ。用兵は詐りを以て謀を運らし、以て勝を決する、所謂虚に對しては實を以てし、實に對しては虚を以てして、常に敵の意表の外に出るの手段を取る。是れを詭道といふ。

能は器量  
用は用意

故能而示之不能、用而示之不用。

そこでことさらに詭道の意味を是れより悉しく説明するが、双方對して敵を見るときに、其の敵が極めて弱く、到底取るに足らぬものと見られたりして、決して之れを侮ることをせず、味方の方を却つて弱く見せかけて、敵に吾れを侮らさせ、又た難なく攻め落すことの出来る、城塞や要塞をも、甚だ六ヶ敷いとして、容易に手を出しかねて居るやうに見せかけて、そして敵に油断をさせて其の隙を見て撃つと味方の兵士は勿論、敵の兵士をも徒らに殺さず、即ち惡戦を爲さずして、陥落するこゝとが出来ゝ。是れが能即ち器量がありながら不能といふ不器量を示す戰術といふもので、其の次は亦た此の處にはどんな軍器を使用したらよからう、と氣がつけば敵

も亦た其の處に使用の軍器はかくくのものであらう、とチャンと察して居るに相違なければ、若しも是れ見よがしに實際使用すべき軍器を運び出す、と敵は必ず之れに對する用意をするから、それだけ戦闘に骨折りをしなければならぬので、そこで重砲でも据え付けるときは、野砲や機關砲を列べるやうに見せて、敵が重砲に氣付かぬやうにする、又た一流ある有名な人を用ふるときも其の通りにすべしだ。是れを用意ありながら、不用意である如くに見せるの戦術である。

近而示之遠、遠而示之近。

近傍の敵陣を撃たむとするには、遠方の敵壘に進軍する風を見せて、不意に近傍を襲ひ、遠方の重地を攻陥せむとするには、近傍の屯營を襲撃する風に装ふて、敵が此方に注意して重地の守備を怠れる間に進撃する方法に出なければならぬ。

誘へ欺

利而誘之、亂而取之。

敵に利益あるやうに欺いてさそひ出し、又た亂れたる時を見て之れを討ち取るのも

必要の戦術である。利益あるやうに誘ひ出すとは、たとへば城塞或は要塞に籠つて仲々出で、戦はず、さりとして攻撃するには、多大の損失を見ること歴々として居るので、容易に手も出せないで、爲に多くの日子を費やすの恐れある場合などに當りては、最早駄目として、引上げるやうに見せて、敵に交通の自由を與へ、何かにつけて敵の利益となるやうにする、と敵は自然に氣をゆるして城塞或は要塞を出で利益なことをすることになる。是れを欺いてつり出すといふもので、此の時を斗つて攻撃するのは、極めて易々たることである。又た亂れに乗るといふは、敵が川を渡るときか、舟に乗るときか、味方の遊軍がさそひいくさをするとか、野砲で荒膽を抜いておくとか、騎兵を出して陣形を蹂躪さしておくとかして、兎に角敵の陣立の亂れたる時を見て、突撃して其の陣地を占領する。是れを亂れに乗じて取るといふのだ。

實而備之、強而避之。

第二本 孫子 始計第一



又た敵が用心堅固にして居るときは、此方も之れに對して用心堅固にしなければならぬ。徒らに策略を恃みて敵の備へを輕むじて、味方の備が不充分であると遂には敗を取るの不面目を見るであらう。そればかりでなく若し敵が滅法に強くして手がつけられぬ時は、之れに對つて戦ひを挑むは、不利益千萬で、軍隊の損失も多大であらうから、成るべくは之れを避けて戦はぬがよろしい。強敵を見て避くるのは、敵に背を見せるといふて軍人としては大に恥づべきことのやうに聞こえるが、其れは時と場合に由るもので、一概に耻辱といふことは出来ぬ。故に此の邊能く熟考して避けるに利ありと見たる時は、躊躇せず避けるのが智將の事である。

扱は擾

怒而撓之。

暴虎憑河の強敵には避ける方が得策であるが、茲に又た襲城、對陣等で容易に戦ひさうになき時は、敵を大に怒らして、其の心をかきみだして常識を失はせると敵の策戦計畫は滅茶苦茶になるゆゑ、此の機會に乗するのにも、亦た一策である。

卑は下  
驕は淺心

卑而驕之。

此方が何か間者か使者かの方法を以て卑く出ると敵は大に漫心する。此の漫心した場合につけこむで攻撃するも必要ぢや。

佚は逸  
勢は疲

佚而勞之。

敵をして、安心させ、懈怠の心を生じさせ、そして戦争に倦み勞らすることも忘れてはならぬ。飽きがきて、なまけた時は、之れを擊破すること容易である。

親は親密  
離は離間

親而離之。

今一ツは平時に當つて間者なり、使者なりを以て敵國と親和し、自然自然に、敵國をひき入れて、其の敵國と親密なる國際關係があつて、ツマリ同盟でもして居るのをひき離し、全然孤立の姿にしてしまひ、其の上で、此の時ぞとばかりに討伐する是れ亦た大必要の計略であつて、之れは外交に重きを置いてする戦路である。

備は準備

攻其無備。出其不意。

第二本 孫子 始計第一

叙上の十二句は一ツ一ツに就いて説明したのであるが、要するに、戦争は敵の戦闘準備の整つてない時を見斗つて攻撃し、敵の思ひがけない處に出るのである。此兵家之勝。不可先傳也。

此れが即ち上來説述したる處のものが、軍人たるもの、學んで勝つ所以の秘訣である。しかし、此の事は、戦争其の者が單純のものでなく、實に千變萬化不測のものである故、事に先つて型に倣めたやうな傳授は出來ない。唯だ戰略戰術の骨法神體を説明するに過ぎない。

夫は發語

夫未戰而廟算勝者得算多也。未戰而廟算不勝者得算少也。多算勝。少算不勝。而況於無算乎。吾以此觀之勝負見矣。

始計も説き去り説き來つて、茲に結論をするに至つたが、さて上に述ぶるが如くであるけれども、しかしまだ戦争をせずして廟堂の計算勘定に於て勝と見ることが出来ること即ち彼我を比較對照して其の算勘に當つて算勘の勝つた方が、其の算勘に

當つて算勘に由つて獲得するのが多いし。之れに反して、まだ戦争せずして、廟堂の算勘に當つて其の算勘に勝てない方のものは、其の算勘に由つて、獲得するものが少い。誠に算勘に由つて獲得するもの、多い方が勝ちで、算勘に由つて獲得するもの、少い方は勝てないものだ。それであるから、まして廟算に由つて見込みが立たず、全然算勘に由つて獲得する處のものないものは勝てやう道理がない。敗けとさまりきつて居るのだ。予は予が以上に説明したる處に見地を置いて戦争といふものを觀察すると、彼我の勝負の數はあり／＼として目の前に見える。誠に鏡に懸けて見るやうにはつきりと見える。

尾池氏曰く孫子の文章は森嚴であつて、名文たるを失はないが、さりとて、千古の絶調とは云へない。其の文法は、つとめて間投詞を省いた跡が見えて、自然、難解の處が多い。難解の處も意味の難解なれば、其の讀者に識見がないからと云ひ得らるべけれども、文法が難解で、自然に後世人が其の意味をあ／＼も見られ、

かうも見られすることになつて居るから、文に由つて意を害して居る點が多いと云ひ得られる。故に無二の明文、千古の絶調と極端な文句を以て此の文章を評價することは早計といふべしだ。しかし孫武は文章に縁の遠い武人であるから、これは無理もない話だ。只だ武人の文章としての無二の明文といへば過褒にならず、批難もなからう。それはさておき、難解の文法故、從來の註解講演者が區々の解釋を恣にして居るので、初學者は之れが適從に迷ふであらうから、予は直に孫武となつて孫武の意中を其のまゝに敷衍して吐露するやうにとめた。或は難する者ありて尾池の見たる孫武の意中であつて、孫武それ自身の意中とは云へないといふかも知れないけれども、予は之れを講ずるに當つての用意は則ち孫武となるの用意をしたつもりであるから、予としては孫子の神髓を述べたりといふて憚らぬのである。そこで從來の註解者の註は、予の見と一致したものゝみを探つた。しかもこれは孫子を敷衍したる思想の言ひあらはし方に於て其の文字の他に

用ふべきものゝないものゝみを一致の文字として採用したので、予が言ひあらはし方の出来るものは總て放棄して講述の清新を發揮し、講述者の見識を失はぬことにした。そこで又た從來の重なる註解講演者の其の解釋の異點を指摘して、予が此れを採用せずに、予は予として一家の見を立てたることを一言しておかう。支那に在ては、曹公(曹操)孟氏、李筌、杜牧、陣暉、賈林、梅聖俞、王皙、何延錫、張預などが重なるもので、我が國には羅山、素行、徂徠、白石の重なるがあり、其他にも數十子あり、何れも區々異説を立て、居るが、其中にも、張預や徂徠はナカ／＼の識見家で、聽くべき説が少くない。されど異説の甚だしき難解の點に至りては、自然牽強附會の謗を免かるゝことが出来ないやうだ。是れ予の探らず、亦た茲に駁撃しやうと思ふ處である。始計一篇中で異説の甚だしき個處は『將。聽<sup>イナガニ</sup>吾<sup>フレバ</sup>計<sup>ス</sup>用<sup>ズ</sup>之<sup>ニ</sup>。必<sup>ズ</sup>勝<sup>ス</sup>留<sup>ム</sup>之<sup>ニ</sup>。將<sup>ズ</sup>不<sup>レ</sup>聽<sup>ス</sup>吾<sup>ニ</sup>計<sup>ニ</sup>用<sup>フ</sup>之<sup>ニ</sup>必<sup>ズ</sup>敗<sup>レ</sup>去<sup>ル</sup>之<sup>ニ</sup>』の一節であるが、之に對して曹公は、不<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>定<sup>ム</sup>計<sup>ニ</sup>。則<sup>チ</sup>退<sup>リ</sup>而<sup>テ</sup>去<sup>リ</sup>也。と解き、孟氏は將<sup>ハ</sup>裨<sup>ナリ</sup>將<sup>也</sup>也。

聽<sup>ト</sup>吾<sup>ガ</sup>計<sup>ヲ</sup>畫<sup>シ</sup>而<sup>シテ</sup>勝<sup>ル</sup>則<sup>チ</sup>留<sup>ム</sup>之<sup>ヲ</sup>。違<sup>フ</sup>吾<sup>ガ</sup>計<sup>ヲ</sup>畫<sup>シ</sup>而<sup>シテ</sup>敗<sup>ル</sup>。則<sup>チ</sup>除<sup>ク</sup>去<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>。と解<sup>キ</sup>、杜<sup>牧</sup>は若<sup>シ</sup>彼<sup>レ</sup>自<sup>ラ</sup>備<sup>フ</sup>證<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>從<sup>フ</sup>我<sup>ガ</sup>計<sup>ニ</sup>。形<sup>勢</sup>均<sup>等</sup>。無<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>相<sup>加</sup>。用<sup>フ</sup>戰<sup>必</sup>敗<sup>ル</sup>。引<sup>リ</sup>而<sup>シテ</sup>去<sup>ス</sup>。故<sup>ニ</sup>春<sup>秋</sup>傳<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>。允<sup>當</sup>則<sup>チ</sup>歸<sup>ス</sup>也。と解<sup>キ</sup>、陣<sup>陣</sup>は孫<sup>武</sup>以<sup>テ</sup>書<sup>キ</sup>于<sup>ニ</sup>闔<sup>閭</sup>。曰<sup>ク</sup>。聽<sup>ク</sup>用<sup>フ</sup>吾<sup>ガ</sup>計<sup>ヲ</sup>。必<sup>ズ</sup>能<sup>ク</sup>勝<sup>ル</sup>敵<sup>ヲ</sup>。我<sup>ガ</sup>當<sup>ニ</sup>留<sup>ム</sup>之<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>去<sup>ス</sup>。不<sup>レ</sup>聽<sup>ク</sup>吾<sup>ガ</sup>計<sup>ヲ</sup>。必<sup>ズ</sup>當<sup>ニ</sup>負<sup>ク</sup>敗<sup>ル</sup>。我<sup>ガ</sup>去<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>留<sup>ム</sup>。以<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>感<sup>動</sup>。庶<sup>カ</sup>必<sup>ズ</sup>見<sup>ル</sup>用<sup>フ</sup>。故<sup>ニ</sup>闔<sup>閭</sup>曰<sup>ク</sup>。子<sup>ノ</sup>之<sup>ニ</sup>十<sup>三</sup>篇<sup>ハ</sup>。寡<sup>人</sup>盡<sup>ク</sup>觀<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>矣。其<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>闔<sup>閭</sup>行<sup>ク</sup>軍<sup>ヲ</sup>用<sup>フ</sup>師<sup>ヲ</sup>。多<sup>ク</sup>用<sup>フ</sup>爲<sup>シ</sup>將<sup>ト</sup>。故<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>言<sup>フ</sup>主<sup>ト</sup>而<sup>シテ</sup>言<sup>フ</sup>將<sup>ト</sup>也。と解<sup>キ</sup>、梅<sup>堯</sup>臣<sup>ハ</sup>武<sup>以</sup>十<sup>三</sup>篇<sup>ヲ</sup>于<sup>ニ</sup>吳<sup>王</sup>闔<sup>閭</sup>。故<sup>ニ</sup>首<sup>篇</sup>以<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>辭<sup>ヲ</sup>動<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>。謂<sup>フ</sup>主<sup>將</sup>聽<sup>ク</sup>我<sup>ガ</sup>計<sup>ニ</sup>。而<sup>シテ</sup>用<sup>フ</sup>戰<sup>必</sup>敗<sup>ル</sup>。我<sup>ガ</sup>當<sup>ニ</sup>去<sup>ス</sup>此<sup>也</sup>。と解<sup>キ</sup>、王<sup>哲</sup>は將<sup>ト</sup>。行<sup>ク</sup>也。用<sup>フ</sup>謂<sup>フ</sup>用<sup>フ</sup>兵<sup>耳</sup>。言<sup>フ</sup>行<sup>ク</sup>聽<sup>ク</sup>吾<sup>ガ</sup>計<sup>ニ</sup>。用<sup>フ</sup>兵<sup>則</sup>必<sup>ズ</sup>勝<sup>ル</sup>。我<sup>ガ</sup>當<sup>ニ</sup>留<sup>ム</sup>行<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>聽<sup>ク</sup>吾<sup>ガ</sup>計<sup>ニ</sup>。用<sup>フ</sup>兵<sup>則</sup>必<sup>ズ</sup>敗<sup>ル</sup>。我<sup>ガ</sup>當<sup>ニ</sup>去<sup>ス</sup>也。と解<sup>キ</sup>、張<sup>預</sup>は、將<sup>ト</sup>。辭<sup>也</sup>。孫<sup>子</sup>謂<sup>フ</sup>今<sup>ノ</sup>將<sup>聽</sup>吾<sup>ガ</sup>所<sup>レ</sup>陳<sup>之</sup>計<sup>ニ</sup>。而<sup>シテ</sup>用<sup>フ</sup>兵<sup>則</sup>必<sup>ズ</sup>勝<sup>ル</sup>。我<sup>ガ</sup>乃<sup>チ</sup>留<sup>ム</sup>此<sup>矣</sup>。將<sup>不</sup>聽<sup>ク</sup>吾<sup>ガ</sup>所<sup>レ</sup>陳<sup>之</sup>計<sup>ニ</sup>。而<sup>シテ</sup>用<sup>フ</sup>兵<sup>則</sup>必<sup>ズ</sup>敗<sup>ル</sup>。我<sup>ガ</sup>乃<sup>チ</sup>去<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>他<sup>國</sup>矣。以<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>辭<sup>ヲ</sup>激<sup>シ</sup>吳<sup>王</sup>而<sup>シテ</sup>求<sup>メ</sup>用<sup>フ</sup>。と解<sup>キ</sup>、張<sup>居</sup>正<sup>ハ</sup>將<sup>若</sup>聽<sup>信</sup>用<sup>フ</sup>之<sup>必</sup>勝<sup>ル</sup>。留<sup>任</sup>之<sup>。若</sup>不<sup>レ</sup>聽<sup>信</sup>用<sup>フ</sup>之<sup>必</sup>敗<sup>ル</sup>。去<sup>レ</sup>之<sup>不</sup>任<sup>也</sup>。と解<sup>キ</sup>、徂<sup>徠</sup>は

此段は勝負の道は右の五事七計にて分るゝ事を丁寧<sup>ニ</sup>云へり將とは辭なりもしと云ふ意なり吾計とは即孫子か勝負のつもりなり右の七計を云なりもし吳王闔閭孫子か右の如く五事七計にてはかりつもりて此戰は勝なり負なりと定めたるを尤と聽入れて用ひ玉は、必勝利あるへし尤と思はず聽入れす用ひ玉はすは必敗北に及ふへしされは右の七計を尤と思召さは留まりて仕へ奉るへし用玉はすは留り仕へてもせんなき事なるゆへ立去るへしと云事なり然れば孫子か心は合戰の勝負は此五事七計にて戰はぬ前に定まると云わけを第一とするなり將の字をはたと讀む事王哲張預が説なり陣陣梅堯臣は將の字を主將と見る一段の意は王哲張預と同じけれとも總じて始計篇の内にて主將を將とは云す文例相違せりはたとよむ説宜しからん又孟氏か説は裨將と見る是は大將の下の大將のことなり施子美が説にははたと讀むと諸將と見ると兩説をあげたり黃獻臣は君より見れば總大將を指し總大將より見れば士大將を指すと云へり將の字を總大將士大將と見る時は下の文をこ

れを留めんこれを去んとよむへし吾計を用ひぬ士大將をは除き去るへし用る士大將をは留め置て召仕ふへしと云意なり一段の義理は何れにても通するなりされとも此段の吾計と云は即上文の七計の事なれば聽用ると聽用ざるをば主將へかけ留まると去をば孫子へかけて見ねは始計一篇の文勢通貫せぬなりさるにても將の字をはたとよますして主將と見る事は文例に合はぬゆへ今王哲張預か説に従ふなり尤吾申す事を用ひ玉はずは立去るへしと云事忠臣の道にはつれたる様なれども戰國七雄の時はいまた君臣の約をなさねとも客卿客將などして他國の人來て其國に居るもの多し孫子も齊の國の人にてこの時吳國へ來り吳王闔閭といまた君臣の分定まらざる前に此書を作りて獻したりと見えたり故に史記の孫子か傳にも孫子初て吳王にまみえたる時吳王の詞に子之十三篇吾悉觀之矣とあるなり又本文の用之とある字を兵を用ると見る説あり其時ははた吾計を聽すして是を用ひはとよむなり字法穩ならず從ふへからすと註し、一齊は副文をして爲將者聽吾計用之

則必得勝矣。吾當留而任之。爲將者不聽吾計用之。則必取敗矣。吾當行而去之。と言ふて居る。其他素行白石等の説あれど大同小異であるから之れを列擧すまい。そこで以上の諸家の見解をば、一致して居る方から算へて見ると、將の字を、『シヤウ』と名詞に讀むものは、孟氏、陣暉、梅堯臣、張居正、一齋にして、其中孟氏は裨將、梅堯臣は主將と固有名詞に用ゐて居り、『マナニ』、『ハタ』、『モシ』など、助詞に讀むものは、張預、徂徠である。又た『オコナウ』と動詞に讀むで居るのは王哲なり。就中徂徠は了得博辨廣識の男だけに、諸説を批議して遂に張預の助詞を正解として採用して居るが、これを見れば亦た批難の餘地なきに似たれど、しかし是れは徂徠が餘りに文法に拘泥してゐるして文法を知らざるの失態に了はりたるものである。車をたづねて車を知らずとは徂徠が此の説の如きものをいふのであるまいか、將の字は、『シヤウ』と名詞に用ゐたる處は始計第一には此の問題となれる一節の外に二ヶ所も有る、然るに、徂徠が無いといふの

は、早計に失して居る。四曰將。といひ、凡此五者將莫不聞といふてシヤウ即ち大將の意であることは上記の講述に明かである。故に徂徠の言は注意の足らぬ處で、又た更にハタといふのも牽強附會であるまいか、凡そ古文なるものは、當時文字が不足なりし故、名詞動詞を借りて助詞に用ゐた迹の明かに見られるのであるから、將の字をハタと讀みたりとて讀まれぬとは云へないが、しかし、此の一節に於てはハタと讀むと下句と接続して意味を取ることが出來ぬ。そこで矢張り此處はシヤウと讀むて名詞にしなければならぬ。若しも孫子がハタとかモシとかと讀むのツモリであつたならば、助詞にする文字は幾らでもある。今日よりも却つて制限なき爲に假借し易かつたので如何なる字でも持つてこられる、何も他の將(シヤウ)とまざる、將(ハタ)の字を持つてこなくてもよい筈だ。故に予は張預、徂徠には反對である。又たオコナウと讀むに至つては餘りの獨斷で御挨拶の仕様がな。孟氏の裨將も獨斷であらう。梅堯臣の主將も獨斷であらう。此れは

矢張り廣き意味に於ける將即ち大將と見た方がよい。天子も大將になつて行くことあり、將軍も大將になつて行くことあり、其の下のものも大將になることがある。其の時其の時變することである。要するに孫武の計を用ゐるの將であれば何將たりとも將であるので孫武も此の意で書いたであらう。されば此の將の字は陣、張居正、一齋等が穩當な解釋をして居るものと見るべしだ。予は今の言葉で將官、大將、總司令官などの意に見て居るが、乃ち大將と見ることは一齋等と同感である。將の字は先づ解決したが、茲に難解の一問題は留之と去之の四字である。此の四字をば孫子が自身の進退をいふたものだと解する連中は、曹公、杜牧、陳暉、梅堯臣、王皙、張預、徂徠、一齋等であつて、將の身の上をいふたもの、即ち將の採否を決する上にいふたものと解するは孟氏である。何れが穩當の解釋であるか、衆論の一致と見るべきは、孫子の自身の上の事に云ひたるに在りといふ方である。しかも徂徠は此處に種々の説を引用して頗る博學を示してそして歸す

る所を曹公等と等しくして居るやうに見らるゝが、嚴重にアラさがしをして見るならば、先生餘程困つたと見えて、此の人はかういふて居るがかうも見らるゝ、彼の人はあゝいふて居るがあゝも見らるゝ、といふてナカナカに断定せず、聊か曖昧にして、遂に雲烟漂渺の間に入るの思ひするやうな筆使ひである。予は孟氏が將を留任せしめ或は除去するといふの解を全然排斥するが、曹公等諸家一致の孫武自身の上の進退と解することにも反對だ。予は此處を前に講述したる通り、將官たるもの、孫武の計策を聽いて採用したら必ず勝つから、意を之れに留めよ。即ち約めて云へば留意せよ言を換へて云へば記憶しておけ。といふことで其の下句の去の字に至りては、將官が若し孫武の計策を聽いても採用しなければ、駄目であるから、寧ろ棄て、しまへ、始めから聞かぬがよい、聞いて益ないことである。といふことで、去は棄或は舍といふ意味に解すべきものと信ずる。そこで、留之去之は留之。去之と讀むで之といふ字は讀まずともよい。讀まずとも其の代

名詞の意味をばといめよ、すてよの中に包含せしむることになる。予の解は格別青筋を立て、論議する程のものでもない、古人先輩と些細の相違である。しかし些細も時に由つて其の差に千里を來たし、白變して黒となるの恐れがあるから、必ずしも看過すべからずだ。始計第一篇中猶ほ處々に論難すべき個處あれど、其れは却つて煩はしければ、此には之れで止めておかう。但だし諸家の註解講義を讀みたる人には一讀の下必ず直に予の新知見の何處に在るかを發見されるであらう。

又曰く。此の首篇は、孫子全篇の眼目、骨子であつて、餘の篇は之が説明であるかに見らるゝ位。故に讀者は此の首篇を十二分に味はなければならぬ。輕々しく讀過してはならぬ。斯の篇は丁度串を以て團子を刺せるごとくに、古今を重ねて其の中心を串いて居る。凡そ人類界に於ける戦争といふ戦争に、一の動かすべから

ざる定義を與へたものだ。支那一局に限つたものでない。古今を問はず、東西を論せずだ。見よ兵は國の大事といふこと之れを歴史の上に見る時は、歴々として眼前に映じ來つて、先づ寒心し、次に首肯するであらう。遠くはアレキサンダー大王、成吉思汗、近くは太閤、ナポレオン。是れ等は千百年一人といふ程の大英雄で、其の戦術は神の如き、戦へば必ず勝ち、滅多に負けたことのない者であるが、けれども其の跡は今如何であらう。地球の半面を睥睨した、其のアレキサンダー大王の都したる都の地まで知る人は稀れではないか、蒙古の風は依然として砂を捲いて白日をして曠せしむるも宇内を席捲したる成吉思汗の跡は風にゆらるゝ燈火よりも早く消え亡せたでないか、六十餘州を併呑して餘威を大明にまで震ふた太閤は、其の子孫の尙ほ幼なき間に其の家を滅ぼした。歐州の天地に獅子吼して、列強を討平すること草を薙ぐよりも速かなりしナポレオンは、生前其の帝國を亡ぼして、身は絶海の孤島に幽閉され、英雄の末路よと詩人に好題目を與

ふるに終はりたではないか。是れ何の故であらうぞ。兵は國の大事といふことに熟慮を缺いた報いである。百戦して百勝する者は其の國を亡ぼす、故に孫武は百戦百勝非善之善也。(謀攻第三)と大に戒めて居る。アレキサンダー大王や、成吉思汗や、太閤や、ナポレオンは百戦百勝の將で、遂に斯かる末路を見た。之れに反して横着ではあつたらうが甚だ戦はぬ家康は遂に天下を一統して其の霸業を子孫に三百年の後までも遺こした。誠に死生の地存亡の道とは能く洞見した言だ。そこで孫武は廟算の大切なることを説いたものであるが、之れをナポレオンが露西亞へ遠征したことに見ても、能くわかる、ナポレオンは自個の才幹を恃むで生平吾が行く處豈にアルプスの嶮あらん哉と傲語し、吾に逆境なしと誇耀せるに拘はらず、露國莫斯科に於て失敗し、纔に身を以て免かれて、ホウ／＼の體で本國に歸つたではないか。是れ全く廟算を過つたのである。五事の中の天に對する攻究が足らなかつたものだ。露國は北國で寒氣凜烈であるのに、冬北を征せずの兵法



を無視して、遠征したる上に、露國が巧妙の手段たる市街焼拂ひをして逃げられたる故、散慘の目に會つた。是れ管々しく云ふまでもなく確に廟算を過つたものである。支那に在つては漢の高祖が冬季に匈奴と云ふ北國を征伐して、白登城でひごい目にあはされた。是れも廟算を過つたものだ。之に反して秦の惠王は、客卿張儀が韓を伐つに如かずと極言せるに反對して司馬錯の言を容れて、巴蜀を伐ちたるが、是れ廟算の宜しきを得たものである。明治初期の征韓の廟議も慷慨家は大に之れを横議して、已まぬが、冷靜なる觀察を以てすれば當時の岩倉大久保木戸は廟算に過たなかつたものだ。若し彼の時朝鮮を伐つて居たならば、日本は今日の進歩を見ず朝鮮も今日の状態とはならなかつたであらう。當時は實に惠王の所謂毛羽未だ成らず以て高く輩ぶべからずの時代であつた。後廿七八年、卅七八年の兩役に於て露清を膺懲して征韓の目的をも達した。此の征清及び征露の兩役に於ける廟算は即ち大成功といふべきものであつた。而して孫武の言の恰も神人に

の告諭の如くなれるに驚かざるを得ない。是に於て始計第一の主眼は國の大事といふことに在ることを知らねばならぬ之れを知ると、第一篇の章節段落は、及を迎へて解くことが出来る。餘りに管々しく説明すれば、自然字句の解に陥つて、折角の主旨を逸するに至る故。こゝら下止めて置く。讀者も宜しく主旨を玩味するに止むべし。

天下戰國。五勝者禍。四勝者弊。三勝者霸。二勝者王。一勝者帝。  
 是以數勝得天下者稀。以亡者衆。  
 吳子

鄭一曰。孫子之計。即其後。陳利。害。開。其。勝。久。以。速。勝。為。貴。不可。不。知。也。玩。之。深。也。王。賈。預。之。說。施。子。美。之。說。吉。田。松。陰。曰。註。家。多。言。不。作。戰。為。客。且。不。食。者。是。耳。不。能。孫。子。也。

### 作戰第二

作戰とは、始計の次に來たるべき問題であつて、之れを誤ると大變である。そこで始計で十二分に目算を立て、そして其の次に作戰を計畫する。是れが兵家の常である。作戰は、たゞかひをおこすと讀むべきであるから此の標題の意味は實戰の準備と解するを正當とす。軍の支度といふも差支なきが、茲に士卒の勇氣を奮作して合戰を速にすべしといふの意にて斯く名けたと説明するものあり。是れは餘りに内容に付いて臆測を逞うせるもので、決して妥當の見とは云へない。凡そ戰爭には、戰略、作戰計畫、戰術の三つの方法があつて、此の三つを一より二、二より三、と經て行かなければならぬ。戰略は始計とは意味がちがへど始計の中に入るべきものであつて、つまり始計の一となつて、最初に立てられるものであるが、作戰

云。有。變。客。主。之。說。破。的。矣。

驍車は輕  
車千四匹  
革車千重  
千乘は千  
帶甲は士  
饋は輸送  
千金は莫  
大の金

計畫は、戰略の次に來たるものである。戰略成つて、動員し、動員して、作戰計畫が立てられ、其の次に戰術を立て、戰端を開きの順序となる。故に士卒の勇氣を奮作して合戰を速にするの意と解するは受取れない説である。

孫子曰。凡用兵之法。馳車千駟。革車千乘。帶甲十萬。千里饋糧。則內外之費。賓客之用。膠漆之材。車甲之奉。日費千金。然後十萬之師舉矣。

孫武申すに、すべて兵を用ふるの方法は、時に由つて變化あるも、概して云へば、普通の戰爭には、輕車が千臺、之に使用する馬が一車に付いて四匹を要する爲め、四千匹、重車が千臺、士卒が十萬人、師團にすれば戰時の師團が三萬人ありとすれば三ヶ師團強を要する。此の外に日本里程に換算して、二百里外に兵站部を派遣するものとすると、兵士の側に投する費用、戰地に投下する費用及び外國觀戰部隊並

に敵の使者等に響應する費用。又は軍器の修繕の材料、一般軍車、補服の奉養等に莫大な金が入る。けれども此の莫大の金があつて、始めて十萬といふ大兵が擧つて立つのである。

其用戰也。勝久則鈍。兵挫銳。攻城則力屈。久暴師則國用不足。師を興すには、上に述べた様に莫大の金が入る。金が入るばかりか、戦争すること久しければたとへ勝つて居つても未は危険になる。久しいと士卒の勇氣がにぶり、士卒の鋭鋒がくじけてしまう。勇氣がにぶつたり、鋭鋒がくじけたりするともう二度と戦争することは覺束ない。其の外、攻城戦則ち城を攻むることは甚だ困難なもので、大概のものが力を盡くしてしまうものである。故に戦争は急速に片付ける工夫を要する。若しも久しく永い間、士卒を戦場にさらして居つたものなら、茲に大變が出来る。大變といふのは、其の國の財政が持てなくなることをいふ。

謀は遠  
兵は財

夫鈍兵挫銳。屈力殫貨則諸侯乘其弊而起。雖有智者不能

善其後矣。故兵聞拙速未觀巧之久也。

誠に士卒が勇氣をにぶらし、鋭鋒をくぢき、又た力を盡くし、財を盡くしてしまうときは、他國が其の困難して、衰へて居るところへつけこむで、戦争を仕向け、遂には腹背敵を受くるといふ蘆梅になつて、モウさうなつては如何なる明智の當局者があつたからとて何とも仕様がなくなる。其の善後策を講ずることは到底出来ないものであるから、ことさらに、戦争は自分が古人に聞くところに由るとツマリはまづぐくても早くしてしまふのが肝腎ぢや。自分は拙速を聞いて居るけれども、また上手にして遅くするといふことは觀たことがない。遅巧よりも拙速を以て用兵の秘訣としなければならぬ。

夫兵久而國利者未之有也。故不盡知用兵之害者則不能盡知用兵之利也。

重ねくいふが、戦争久しきに及びて、士卒を外に出し、永陣してそして其國が利

籍は交代  
戦は輸送  
用は軍器

益したといふことは、また之れはあらざることである。即ち會つてないことである。それゆゑに、用兵の害毒をくわしく知つて居らないものは、用兵の利益をくわしく知ることの出来るものでない。

善<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>兵<sub>者</sub>。役<sub>不</sub>再<sub>レ</sub>籍<sub>也</sub>。糧<sub>不</sub>三<sub>レ</sub>載<sub>也</sub>。取<sub>レ</sub>用於<sub>レ</sub>國<sub>也</sub>。因<sub>レ</sub>糧<sub>於</sub>敵<sub>也</sub>。故<sub>レ</sub>軍<sub>食</sub>可<sub>レ</sub>足<sub>也</sub>也。

運巧よりも拙速が用兵の秘訣たることを心得て、上手に戦争するものは、最初送遣引卒の士卒を以て戦争を成し遂げ、決して、交代の士卒を用ゐることがない、二度と士卒の送遣を請求せぬ。糧食も二度とは仰がぬ。即ち度々輸送をしてもらはぬ。軍器は本國より相當に持ち行きて、不自由なしにして、糧食は敵の方のものを奪ひ取つて之れを食ふことにする。良將は斯様にするから、兵糧に困難せぬ。後方部隊は常に不足を告げぬ。

國<sub>之</sub>貧<sub>於</sub>師<sub>者</sub>。遠<sub>レ</sub>輸<sub>也</sub>。遠<sub>レ</sub>輸<sub>則</sub>百<sub>レ</sub>姓<sub>貧</sub>也。

糧食のことは戦争中大切の一事である。輕々しく看過してはならぬ。見よ國が戦争して貧乏になるのは、糧食を遠く異境に輸送するからである。糧食に對する物入といふのは少々でない。之れを仔細に吟味すれば驚くばかりである。遠く輸送した爲に國が何故に貧乏するかは、其の人民の困窮でわかる。即ち遠く輸送すると其の人民が貧乏してはじめな有様に陥るのである。

近<sub>於</sub>師<sub>者</sub>。貴<sub>レ</sub>賣<sub>也</sub>。貴<sub>賣</sub>則<sub>レ</sub>百<sub>レ</sub>姓<sub>財</sub>竭<sub>也</sub>。財<sub>竭</sub>則<sub>レ</sub>急<sub>於</sub>丘<sub>役</sub>也。

遠征して、其の戦地の近在にて軍隊並びに士卒が物を買ふと自然奸商といふものが出て来て、物を高價に賣り付け又た奸商なしとするも自然物品に缺乏拂底を告げるから、物が高價になる。物が高價になつても買ふべきものは買はねばならぬから、買ふと遂には其の士卒が所持の金錢も竭盡してしまふ。金錢を竭盡すれば、士卒は亦た之れを本國に訴へて、金錢を送付してもらふことになる。そこで本國の人民は遠征の士卒の窮乏を見棄ておくわけにゆかぬとて金錢を送付する。手軽く送付さる

丘は丘  
役は役  
十は十  
六は六  
ははは  
馬馬馬  
軒軒軒  
田田田  
九九九  
其其其  
四四四  
家家家  
合合合  
井井井  
百百百  
ににに  
耕耕耕  
敵敵敵  
家家家  
法法法  
ののの  
役役役  
ふふふ  
ななな  
ははは  
丘丘丘  
十十十  
六六六  
ははは  
馬馬馬  
軒軒軒  
田田田  
九九九  
其其其  
四四四  
家家家  
合合合  
井井井  
百百百  
ににに  
耕耕耕  
敵敵敵  
家家家  
法法法  
ののの  
役役役  
ふふふ  
ななな  
ははは  
丘丘丘



こまたて  
設機は大  
肩牛大車  
は領食輸  
送車は我  
が六斗は  
意汗は馬  
糞豆殺糶  
一斤は我  
が百二十  
斤戦は古  
車戦は古  
ありたる  
戦法類  
なり

ろである。

故車戰得車十乘以上賞其先得者而更其旌旗車雜而乘之卒善而養之是謂勝敵而益強。

それ故に又た敵の利を取ることに妙法がある。それは車戰をした時に、車十臺以上を奪ひ取つたならば、其の車に就いて居たる敵方の士卒の降參者にして逸早く降參したる分に賞を與へて之れを勞ひ、そして其の車には敵の旌旗を取りはづして味方の旗旗を立て、其の車に降參者に乗せて、これ見よがしに敵陣に示す、是れ一は面當となり、一は敵方の士卒の氣を引いて降參を誘導するものである。斯くて其の士卒を懇に撫養して敵陣に捕虜たるの心を忘れしめ、寛仁の將かな、慈仁の將かなと歎服せしむるやうにして、遂には此の士卒を何に斯の用事に使用する。是れをば敵に勝つて尙ほ更に味方の強みを倍すといふものだ。

故兵貴勝不貴久。

それ故に此れを一口に言へば即ち上來記述の主意を一言にして盡さば、戦争といふものは、勝に在るのだ。勝つことを貴ぶのだ。勝つことを貴ぶのであつて、何も上手だからといふて永くなるを貴びはしない。

故知兵之將民之司命。國家安危之主也。

それ故に戦争の極意を知つて居る良將は、人民の吉凶禍福を司るところの星とも云ふべきである。又た國家の安穩危亡に關係する國家の主人公ともいふべきである。誠に戦争は至難至險のもので、此れに將たる人の地位は重い。輕々しく戦争すべからず。輕々しく將を選び、又た將たらむが爲に將たるべきものでもない。

尾池氏曰く。本篇に就いても字句に多少の異説あれども、擧げて彼れ斯れ云ふべきほどのことではない。但だ本篇には、『故』の字が甚だ多いが此れは文章家から見れば頗る拙なるものである。併し孫武は文章家でないから、斯かることには毫も頓着しない。ドシ／＼使つて力を入れて言を結むで居る。是れを見る度に予は古

司命は吉  
凶禍福を  
司る星

文と偽古文との區別は斯かる處で見らるべきであらうと信ずる。偽古文はことさら  
に古文にするに付ては、其の文章が秩序整然として一絲亂れずといふの書き方だ。  
書でも贋物の方が能く出来て居るといふが此の邊の工合をいふたものであらう。  
之れに反して眞の古文は少しも巧みがない。自然に出来て居る。故の字を使用す  
べき必要があれば何字でも使用して關せず焉だ。斯様な下手な處が却つて文章を  
藝術として研究しない以前の物として認め得らるゝやうに思はるゝ。否な思はるゝ  
のみでない。是れは全く事實である。讀者夫れ之れを思へ。之れを究めよ。

\* \* \* \* \*

又曰く。始計に次いで當然起るべき問題は無論作戰であるが、孫武が説にして今  
日行はれざるものは車戰とか、矢弩などであるが、其の精神に至りては變りはな  
い。日本が日露戰爭に費やした金は二十億餘で、千金どころの話でないが、孫  
武の千金は莫大といふことであつて、千里といふことも六町一里の千里を數理に

日。約其

所用千金。日  
然後能興  
十萬之  
師。此乃  
其官費用  
之。廣以  
戒也。久

いふたものでなく、これは要するに遠方に出兵せば莫大の金があるとの話である  
のだ。誠に莫大の金があることは日露戰爭でわかる。勝も久しければ云々とは能  
くいふたもので、戰爭は長引くと物入がするばかりでなく、兵士が故國を思ひ出  
し或は疲勞をしてしまひ、又た風土が異なつて居るところから、病氣に罹り結局  
勝つて敗けるといふ下世話に陥る。諸侯が起つといふことも之れは實際である。  
今日は諸侯がないかほりに、他國が隙に乗るので、日清戰爭の講和談判が終結  
すると、露佛獨が所謂三國干涉と出かけた。是れは孫武の謂ふところの其の弊に  
乗じたものだ、果せるかな、明治の大政治家大豪傑を以て任ずる伊藤公も絶世の  
奇才と容るられたる陸奥伯も、是れには何とも手の出しやうがなかつた。智者あ  
りと雖も其の後を善くする能はずで、遂には干涉に屈服したではないか。孫武の  
言は實に至言である。しかし糧に敵に因るといふことは、敵兵の糧食を奪ひ取る  
のみならず、總じて古代の戰爭は敵國に入れば、其の地の人民の物をも掠奪した

第二本 孫子 作戰第二

ものであつて、孫武の文意は此の意味をも含まれて居るが、是れは今日に於ては國際條規の許さざる所である。今日は非戦闘員を殺し、又た其の者の物資を掠奪することは罪惡となつて居れば、孫武の此の方法を繼承することは出来ない。さりとて之れを以て即ち今日の進歩したる國際道徳を以て孫武の意見を批つことはよろしくない。孫武の當時は斯かることを當然として居たもので云はゞ時代精神である。それ故孫武をして今日にあらしめば勿論斯かる論を立てることはないとして、孫武の此の意見を寛容すべきであらう。又た車戦が廢たれて居るから、捕虜を車に乗せて、敵に示すことは出来ない。しかし捕虜を勞ふことは出来るのである。ねぎらうのみならず。孫武の意たる、敵の氣を弱はむる方法としての捕虜を道具に使ふことは幾らも方法がある。要するに之れも亦た其の意を探るべしだしかながら本篇の主意は戰術の末にあらすして、作戰計畫に由つて、戦争を拙速にしてのけるといふに在るので、之れを詮するに、經濟問題から出て居る。往

昔秀吉が小田原攻城の如き、又た外國ではセバストポール攻撃の如き、近くは我が旅順口攻圍の如き何れも至難の業にして、其の役に當つた將軍は頗る苦慮し、且つ多くの日子をも費やし、多くの人命をも失ふて居る。是れ城を攻むれば力屈くといふの意に合するのみならず。經濟問題から云へば、久しく師を暴らせば即ち國用足らずの意に合するといふものだ。動ともすると戦争狂たる日本人は、能く之れを玩味して鑑戒すべき必要があらう。

殺<sub>レ</sub>人<sub>ヲ</sub>安<sub>シ</sub>人<sub>ヲ</sub>殺<sub>ス</sub>之<sub>ヲ</sub>可<sub>ク</sub>也。攻<sub>ム</sub>其<sub>ノ</sub>國<sub>ヲ</sub>愛<sub>ス</sub>其<sub>ノ</sub>民<sub>ヲ</sub>攻<sub>ム</sub>之<sub>ヲ</sub>可<sub>ク</sub>也。以<sub>テ</sub>戰<sub>ヲ</sub>止<sub>ム</sub>雖<sub>モ</sub>戰<sub>ハ</sub>可<sub>ク</sub>也。

司馬法







敵は等

むるのだ。敵國を亡ぼすけれども、しかも大仕掛で長陣して我が國家をして非常の物入をせしめ、社會をして困難に陥らしめて、そして後に亡ぼすのではなくて、急速に亡ぼすのだ。誠に良將はきつと損傷せず國家を國家の間に戰爭して居る。それであるから、其の軍國は少しも鈍氣を生せず、常に生きたる元氣が満々で、自然に有形無形の利益を全ふることが出来る。此れをば敵の謀を未發に攻めて手も足も出し得ぬやうにするの方法といふのである。

故用兵之法。十則圍之。五則攻之。倍則分之。敵則能戰之。少則能逃之。不若則能避之。故小敵之堅大敵之擒也。

それである故、戰爭の法としては、我が軍勢の敵に十倍して居る時は、其の敵を包圍するがよろしく、五倍して居る時は、包圍せずして攻撃するがよろしく、又た敵の倍數の場合は其の手分けしてかゝることにし、若しも同等の數である時は、根氣よく上手に敵對して戰爭し、敵よりも少數であつた場合は、衆寡敵せずの常態を忘れ

輔は車側  
の軍は密  
周は密  
自軍は密  
な軍は密  
自由軍は  
軍は勢は  
三軍は總

ず、大死するよりは、逃げて徐ろに勝利の法を講せよ。又た我が軍が敵よりも不利の地位に在る時は戰爭をしかけられても、寧ろ避けて之れに及向はぬやうにするが得策である。それであるから少數の軍で思慮もなく、智謀もなく、猪武者的に戰ふのは、末は多數の軍の捕虜となるものだといふのである。

夫將者國之輔也。輔周則國必強。輔隙則國必弱。故君之所以患於軍者三。不知軍之不可以進而謂之進。不知軍之不可以退而謂之退。是謂糜軍。不知三軍之事而同三軍之政者則軍士惑矣。不知三軍之權而同三軍之任則軍士疑矣。三軍既惑且疑則諸侯之難至矣。是謂亂軍引勝。

上に述べたところは、戰爭の常法で別に奇も何もない當然の話である。茲に話はかはるが、大將即ち總司令官といふものは、國家の補佐だ。車の兩傍に在るを、へ木である。そこで此のそへ木がうまく密着してあると車がよく回る如く、大將たる者

が、國主と密着して、國主に忠義心が厚く、國主も亦た大將たる總司令官に軍事上の事を一切萬事打ち任かせてやらせ得るの度量があつて、双方の間が親密であれば其の國家は必ず強く、之れに反して若しも大將と國主とが、輔の間が隙いたやうに離れ／＼の考で居ると其の國家は一致を缺いて居るから必ず弱い。それであるから國主たる人が戦争に邪魔となつて大將の憂患の原因となるものが三ツある。一は國主が戦場の總司令官へ濫りに容喙して、我が軍はイマ進軍することが出来ないのを之れをば國に在つて、其の事情を知らずに進めよと命令して來たり、また我が軍の退くことの出来ない事情の下に在るにも拘はらず、之れを知らずして、之れに退けよと命令し來たること、是れ等は戦場に於て總司令官に権限を與へないされかたで大將や軍全體は少しも自由なく、宛かも縛られたる犬の如きものだ。そこで之れをつながれて自由ならぬ軍といふ。是れが一の憂患である。總軍勢の事を知らずに、軍勢を監督するもの即ち監軍が總司令官の外にあらはれてツマリ國主が戦争を氣に

して總司令官に任せきらず、心配のまゝ自分の腹心のものであればとて、軍事上の知識に乏しきをも頼着せずには派遣して監軍せしむると一方は専門家、一方は門外漢であるにかゝはらず、一方は國主の寵をたのみで、虎の威を借る傾きがあるから、自然は總司令官の命令、號令が行はれなくなる、一々監軍と相談することになつて戦争が捗とらず、總司令官がやす／＼になる。そこで其の下に在る將校士卒は大に其の不一致の命令號令に當惑することになる。是れが憂患の第二である。それから戰場に於ける總司令官は一人に限つたもので、此の總司令官が、總軍に於ける権利と權威を行ふのである。然るに國主が若し總司令官を二人こしらへて二人を派遣するときは、そして其の一人でも總軍に於ける總司令官の権限を知らずして矢張り同じやうに命令したり、號令したり賞罰したりするなど、其の總司令官の任務を執つて居たならば、將校士卒は命令號令の二途に出づるに驚き、賞罰の不公平に怒り、遂に將校士卒皆々何事でも斯くなつたかと疑惑の念を起こして、戦争しなくなる。是れ

を憂慮の第三といふのである。斯くて總軍が最早當惑し且つ疑念を起すときは、他國が其の隙に乗することになる。他國よりの災難が續發して來る。是れをば自分で自分の軍を亂れさして、敵の勝利を招いて見るといふものだ。自業自得で自分が負けて敵に自分の敗を見せて、自分は敵の自分に勝つを見て居るといふことを勝を引くといふのだ。随分氣の利かぬ、人の善い仕方である。

故知勝有五。知可以與戰。不可以與戰者勝。識衆寡之用者勝。上下同欲者勝。以虞待不虞者勝。將能而君不御者勝。此五者知勝之道也。

それゆゑ、大に注意を要すべきであるが、茲に普通の場合に於て勝利を得るの理由を知ることが出来る、それには五ツの理由がある。第一は戦闘開始の場合と否とを預め知りて、戦闘すべきときに爲し、戦闘すべからざる場合には爲さぬやうにする此の兵法を知れる者は勝つのである。第二は場合々に人数の多少を加減して派遣

するものは勝つのである。第三は上下欲を同うするので、總大將即ち總司令官は常に將校士卒の心中を思ひやりて、其の心を酌み、將校士卒の心と一ツになるやうにとどめること、即ち大將より下つて將校士卒の欲するところ、と其の慾を一にして與に戦争を早く速く片付けむとすると自然上下一致で、所謂團結心が強くて、戦へば必ず勝つのである。第四は自分の用意を以て敵方の不意を待ち受けて之れを攻撃すれば必ず勝つのである。第五は總司令官たるものに其れだけの器量があつて、之れを遣はしたところの國主たるものが此の總司令官に何かと命令や指圖をしたりして、總司令官の思ふやうにならぬやうな窮窟な目にあはすことがなかつたならば必ず勝つのである。以上の五個條は勝を知るの道となつて居る。

故曰知彼知己百戰不殆。不知彼而知己。一勝一負。不知彼不知己每戰必敗。

それゆゑに古人の語に曰へるには、敵方の強弱、利害を知り、又た味方の強弱、利

害を知るときは、たとへ勝つことなくとも、勝つことは第二段としておくとも百遍戦つても、百遍ながら危険に陥るやうなことがない。又た敵方の様子は薩張り知らずとするも、味方の様子を十分に知つて居るときは、一度は勝ち、一度は負けして五分々に了はるであらうが全然負けることはない。之れに反して敵方のことを知らず、味方のことをも知らず、おさまりもとも知らぬ凡クヲであつたならば、戦争する毎に屹度負けて居るにちがいない。と此の古人の語は勳かすことの出来な金言で兵法家の百論に價すべきであるが、謀攻といふことも結論すれば此の一語に歸するのだ。

尾池氏曰く。伐謀の一句に付いて梅堯臣は以智勝と云ひ、王皙は以智謀屈人最爲上と云ひ、何氏は敵始謀攻我我先攻之易也揣知敵人謀之趣向因而加兵。攻其彼心之發也。と云ひ張預は敵始發謀我從而攻之彼必喪計而屈服。と云へるが此の句は何氏、張預の解が妥當で、王皙や梅堯臣の説は餘りに穿鑿し

曰。此攻心法也。

すぎた説といふべしだ。徂徠も亦た伐謀とは敵の謀を破る事なり合戦に及ばず尤城攻にも及ばず敵の謀の根を知て是を破りせつかくたくみし謀の無になる様にする事なりかくの如くする時は敵手を出すべき様なくなるゆへ敵を心服さする道にて軍法の極上是にこえたる事はなきなり王皙梅堯臣などが説には軍を用ひず智謀を以て敵を伐つ事を伐謀と云と注せり文義穩かならず従ふべからず。と云ふて居る一齊も亦た伐於謀先と筆して、徂徠も同意見である。予も亦た徂徠等と同意見である。次に伐交と云へるをば張預は兵將交戰將合則伐之と解せるが、徂徠は亦た之れを駁して曹公、張預が註に伐交と云を兵を交へんとする所を伐つと見て兩軍備を立て、鋒の合はんとするさかひを見切て此方より押かけて先んずる事を云ふと説く穩かならず従ふべからずと云へるが、張預、曹公のみでない、各家が區々の解をして居るが要するに徂徠の云ふ處が本當である。是れに付いて杜牧は適切に註して居る、非止將合而已。合之者皆可伐也。張儀願獻秦地六百里

於楚懷王。請<sub>レ</sub>絶<sub>ニ</sub>齊交<sub>一</sub>。隨何<sub>ヲ</sub>於<sub>ニ</sub>黥布坐上<sub>一</sub>。殺<sub>シ</sub>楚使者<sub>一</sub>。以<sub>テ</sub>絶<sub>ニ</sub>項羽<sub>一</sub>云々と予は杜牧の明解に與するものである。

又曰く、胡宗憲は着<sub>ニ</sub>到此處<sub>一</sub>。纔見<sub>ニ</sub>孫子<sub>一</sub>伎倆<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>與<sub>ニ</sub>世之好戰輕戰者<sub>一</sub>同<sub>一</sub>といふて居るが、誠に千古の卓見を遺こせる孫武の此書の此篇に對する評語として尙ほ物足らぬ心地がする位である。此の篇に於て彼れは百戰百勝の善戰に非ざるをいふて居るが、此の言は我が國民の十二分に玩味すべき言である。我が國民は動もすると戰爭を絶叫し、軍人は極めて戰爭が好きに出來て居る。然れども、まだ孫武の所謂拙速を以て終閉しては居らぬ。征清に於ても、征露に於ても、随分物質と人命とを犠牲にした。まして全國など、洒落た結果を見るなどは夢にも覺束なかつた。今日では戦後の困憊が國民一般に波及して何れも疲勞の體で、此の瘡痍の癒えるのは尙ほ前途遠しである。此に於て國を全ふしたる戰爭とはいへぬ。孫武から見れば、尙ほ幼稚の戰略であつたらう。孫武が名言にして古人の實際に行

つて居るもの、少くなくないが、不<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>則<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>避<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>と云へるに付いて思ひ出すのは孔明と對陣して容易に手出をせず孔明が何遍挑戰しても決して及向はなかつた仲達のことである。仲達は孔明とくらべて見れば世人には一種の感情も手傳はれて何だか平々凡々の將軍のやうに見えるが、其の實彼れは非凡の將であつた。彼れは戰爭せずに孔明を殺した、戰爭せずに蜀を滅ぼしたも同様な遺口をした。孔明に不<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>を知つて挑戰に應ぜずに遂に孔明をして病死せしむるに至らしむるが如きは、兵法の極意に達したものである。又た監軍に於ける失敗は能くあることで、唐にあつては宦者魚朝恩が爲に九節度が敗北し、我が國に於ては監軍といふほどのことでもなければ石田治部を朝鮮に遣はした爲に諸將が治部と不和を醸して戰爭の上に影響すること少からざるを見たが、此れは國君たるもの、大に鑑戒を要するところのものである。予は本篇を通覽して孫武が情に密にして、言至達せると共に、謀攻の一言、必ずしも戰爭にのみ用ゐらるべきにあらず。擊劍、柔術其

他日常人と掛引すること乃至外交家の外交術として大に服膺すべきものであることを切に所待するのである。百事機先を制するは亦た謀攻の謀攻たる處であらう

七五

全勝不闘。大兵無創。與鬼神通。微哉。微哉。

六 韜

### 軍形第四

曰形者。謀之端也。因形以知謀。知謀以知所。則知所法。矣。

杜牧の説

凡そ物、内に在りては心となり、心動いて情となるが、是れしも尙ほ内にあるものである。然るに情動いて外にあらはれては必ず形となる。今戰場に於て各々陣を布き、軍を配置する中にも、其の優劣の見えて、そして其の總大將の智略如何が遺憾なく發揮される。是れ即ち軍の形であつて、情が動いて外にあらはれたものである。そこで將帥は之れを見て敵の強弱智愚を察するのである。此れを軍形といふて孫武の講明せむとする處である形に因つて情を見る。形無き者は情密で、形有る者は情疎で、密なれば則勝ち、疎なれば則ち敗ると云ふものがあるけれども、是れは必ずしもさうとは限らぬ。固より隠晦して情を示さず、自然形を見せぬがあるけれども亦た暗愚にして情なく従つて形の見えぬ場合もある。そこで將帥が觀察は

第二本 孫子 軍形第四

七九



しかく單純には行はれない事情のものである。が概して云へば謀淺きものは形あらはで見易く謀深きものは、形かくれて見にくいが通例で孫武はこゝを説いたのであるから其の心して讀むべきだが亦た必ずしも左様どのみ解して、思ひ過ごしをして、却つて不覺を取るといふやうな無細工なことに陥らぬやうにすべきである。是れが即ち學問の奥義といふものだ。

孫子曰、昔之善戰者先爲不可勝。以待敵之可勝。不可勝在己。可勝在敵。

自分は茲に更めて軍形篇を述べようと思ふ。そこで謂ふに、古來の良將といふ者は思慮が周密で、布陣配兵の方法其の宜しきを得て、そして先づ我が軍は極めて堅固で、汝等の容易に戦ひを開始し得べきものでない、汝にして若し戦鬪を開始すれば必ず粉砕して呉れるぞと我が威を示して於て、敵に仕かけられて敵にかたれるやうなことを少しも見せぬやうにしてそして以て敵を一敗地に塗れさせるの機會を待つ

て居る。是れが虎蟻に據り、龍雲にのれるの形である。敵に勝つといふことは敵に在る譯ではなくて、味方の方寸に在るので、云はれ勝たれ得るといふことは自分の方に在るものだ。亦た勝つことの出来る其の次第は敵の上に在るので、こゝの道理を能くく玩味しなければならぬ。自分の方で容易に仕かけられぬやうにして待つて居ると敵の方に必ずすきが出来てくる。是れを機會を待つといふもので、其の機會は即ち我れの勝ち得る所以で之れが敵にあるのである。

故善戰者。能爲不可勝。不能使敵之必可勝。  
それゆゑに如何に良將でも、此の方で敗けないといふの軍形を作つて威を示しながらも、此の機會といふ敵に在るところのものを敵に作らしむることは、屹度保證して出来るものでない。

故曰。勝可知而不可爲。

それゆゑに古人の言にも、敵に勝つことは知れても、其の勝つべきの機會をこしら

へさすすることは出来ないものである。

不可勝者守也。可勝者攻也。守則不足攻則有餘

すべて敵が攻めて来て勝つことの出来ない。即ち此の方の敗けないのは、此の方が守つて居るときである。手出をせずに機會を待つて居るときのことである。そして又た此の方が勝つことの出来るのは、機會を待つて居て敵へ攻め寄せたときのことである。守るといふことは敵が名将ならば格別大抵の場合はその守つて居る方が我が軍をば兵が不足で守つて居るのであらう。容易に手出をしきらぬのであらう。と侮辱してから攻めかゝるのであるから、我が軍が敵の目には不足のやうに見られて却つて我が軍に利益がある。されば我が軍にして敵が斯く侮辱してかゝるやうの機會をこしらへたる場合をつけこむで攻むるときは我れは却つて兵が餘りきりあつて少しも不足を感じない。

善守者藏於九地之下。善攻者動於九天之上。

九地は地底は最高の天

城塞或は陣を構へて十二分に守勢の地位に立つて居ることの出来る者は、之れをたとへて云はゞ下に隠れては最下層の地の底に在るやうにして敵に我が軍勢の多寡乃至戦場の計略等を見せず、又た十二分に精力を發揮して、上手に攻勢を取つて進撃の出来る者は、天上至極の高處に活動して天上より攻撃して敵に手の付けやうのないやうに見せられる。

故能自保而全勝也。

それであるから上手に我が軍を保全して、即ち兵を損せずしてそして全き勝利を博することゝなる。

見勝不過衆人之所知。非善之善者也。

凡そ將帥にして、一たび戦場に臨むで、勝利を博することを先見する、其の先見のことながら、誰れでも見て誠に六ヶ敷いことだとして賛嘆するやうなことで之れ以上を超えたことながらに對する識見があるのでなくては、良將の良將と云はるゝもの

誰でも六ヶ敷いことだと云ふやうなことは、誰れにでも眼がつき易い。平々凡々人の六ヶ敷いとするやうなことをすると人情に投じ易い。誰れにでも直ぐ目立つからである。そこで戦争に勝利を博して、天下の人々が擧つて上出来といふときは其の戦争の仕方は花やかで眼につき易いからの場合が多いが、此の場合の戦争の仕方はツマリ花やかな芝居がかつた仕方だ誰れにも見易いことで、之れを天下の人々が擧つて上出来といふとも、其れは上出来ではない。人心の機微を制して隠微の間に勝利を博して敵をして呆然たらしむるのみならず、本國の朝野の人々を擧げて歴然たらしむることでもない。上出来の上出来とはいへないのである。あつけない感せしむるやうな出来易い時を逸早く捉へてあつけない勝つのでなくてはならぬ。

秋は生ひ、冬は死す、春は生ひ、夏は死す、此の如きは、其の如きなり。

故擧秋毫、不爲多方。見日月、不爲明目。聞雷霆、不爲聽耳。

是は、其の如きなり。

それゆゑにこゝにたとへていへば、細い毛を持ち上げることば力量のある人のすること、はししない。太陽や太陰を見ることがは能く見える人のすること、はししない。いかづちやいかづちのはためきを聞き取るのは、はやみゝの人のすること、はししない。これ等のことは誰れにでも出来ることであるから、平凡のことである。がしかし此の平凡のことが、戦争には最もよき手段で、芝居がゝらず、あつけないかほりに、兵を全ふして勝利を博するものであるのだ。

古之所謂善戰者、勝於易勝也。

古來の名將の戦争振りを見るにいつも誰れでも、名將たるものは必ず少しも奇のない、難のない、ホンの勝ち易い機會に投じてあつけなく勝つて居る。

故善戰者之勝也、無智名、無勇功。

それゆゑに戦争の上手な名將が勝つたときは、あつけなく勝つて居るから、天下の人には智者ぢやといふて其の名を知られるでもなく、勇者だといふて其の勳功をほ

めらるゝでもない。平々凡々に見られて居る。

**故其戰勝不惑。**

その名將があつげなく、たわいなく勝てることで勝つのであるから、此の戦争に斯くすれば、と計畫してかゝつた以上は見え透いてやさしいことゝて、少しも開戦中に心に惑ひを生ずることがない。

**不惑者其所措必勝。勝已敗者也。**

心に惑の生ぜぬ者は、其の計畫が既に屹度勝算歴々のところへ置いてあるのであるから、敵の方に既に敗れて居るといふてもよい、既に敗れて居るところにつくむで勝つのであるのだ。

**故善戰者立於不敗之地而不失敵之敗也。**

それであるから、上手に戦ふ者は、敗けない地位に立つて居つて、そして敵の敗ける氣合を見のがさすにつくむで戦ふやうにする。

**是故勝兵先勝而後求戰。敗兵先戰而後求勝。**

これである。此の道理であるから、かちいくさは先づ計畫で既に勝つてしまつてそして後に戦はなければならぬ時は、其の時こそ求めて戦ふ。之れに反してまげいぐさは先づ無茶苦茶に戦つてしまつてから、そして後に勝利を求めやうとする。此れが上手と下手の分れる處である。下手なものは、戦争といへば其の目的は戦争するに在りと觀念して居るが、上手なもの即ち名將は戦争の目的を戦争に置いて居ない勝つことを目的にして居る。そこで勝つことを計畫して戦ふことを計畫しない。是れ勝を得る所以である。

**善用兵者修道而保法。故能為勝敗之政。**

更めて云ふが、上手に軍を運用する名將は、始計に於て云ふたところの總司令官に必要缺くべからざる五事の一たる法を保つて過ちのないやうにする。それで此の名將は、上手に戦場の主權者となつて勝つことの政治をするのである。

兵法。一曰度。二曰量。三曰數。四曰稱。五曰勝。地生度。度生量。量生數。數生稱。稱生勝。

古來の兵法に云ふてあるところを見ると、其の第一條は地形の廣狹、高低、遠近を測定すること第二條は兵の員數を秤量すること第三條は軍器を算勘すること第四條は軍の輕重を權衡すること、第五條は一條より四條に考慮して勝利を得なければならぬことだ、そして此の五個條の貫通して相ひ補ひつ相ひ生ずるところをいへば、戰爭する場所たる土地といふものがあつて、それが爲に之れを測定するところの度が生まれ、度が生れると土地の測定が出来てしまふから、其の土地を辨にたとへて移し込むところの量といふものが生まれる。量が生まれると此の量中の數は幾つあるか幾つあれば此れに配當するところの軍器の數は幾つあればよいとて數といふものが生れてくる、數が生れると茲に一軍の組織が出来て開戦の準備も済ましたものだから、然らば此の一軍と其の準備とを以てすれば幾千の敵軍に對抗することが出

銖は二百に二十  
兩は百に十  
一銖は一分の四  
一分は六厘に

來るであらうか、之れをはからねばならぬそこで數から引續いて此の輕重をはかることたる權衡の稱といふものが生れてくる。既に權衡まで生まれたとすれば此の上

に今一つ戰爭の目的物たるものが當然生れてこなければならぬ。此の目的物は即ち勝利といふものだ。戰爭は勝つのが目的である。故に勝利が最後に生れてくる。稱が當然勝を生むものだ。と書いてある。是れが古來の兵法の云ふところである。

故勝一兵若以鎰稱銖。敗一兵若以銖稱鎰。  
古來の兵法にも上記の如くにいふてあるから、之れを重み、輕みにたとふれば、必勝とさまつて居る方の兵は二百目を以て四分一厘六毫とくらべると同じで四分一厘六毫が、どうして二百目とくらべものになつて秤にかゝらうや、之れに反して必敗とさまつて居る方の兵は必勝の方とはさかさまで、僅に四分一厘六毫で以て二百目と重みのくらべをしやうとするものであつて、到底も話になつたものでない。

勝者之戰若決積水於千仞之谿者形也

さて自分はこゝまで説き來たりて、軍形篇は最早大體を云ひ盡くしたつもり故、此に是の文を結ばうと思ふが、之れを一口にたどへていふて結ばうならば、勝利歴々たる方の戦争振りか彼の隄を築いて溜めて置いた満々たる大江の水を千尋もある谷底に其の隄を切つて落とすやうな有様になるのは、以上に説き去つた軍形といふものだ。十二分の準備をして待つて居るところが隄を築いて溜めて居るところの水と同じで、一朝敵にすぎが出來て、之れを攻撃するとき、敵は既に敗けて居るので千尋の谷底に在るものやうなもので、其の勢にドウして勝てるものか、とても勝てる道理のものでない。開戦の最初にあたりて斯く準備してかゝつて斯かる結果を見るのを自分の軍形といふのである。

尾池氏曰く、守則不足。攻則有餘の句に付いて異説甚だ多いが、曹公は吾所以以守者。力不足也。所以以攻者。力有餘也。といひ、李筌は力不足者可以守。力有餘者可以攻也。といひ、梅堯臣は守則知力不足。攻則知力有餘。といひ、

ひ、張預は吾所以以守者。謂取勝之道。有所不足。故且待之。吾所以以攻者。謂三勝敵之事。已有其餘。故出擊之。言非百勝不戰。非萬全不闘也。後人謂不足爲弱。有餘爲強者。非也。といふて居るが我が徂徠は守るときは足らずとは吾守て戦はざるべきの體體ていたらく外よりは不足なる様に見ゆることとなり然れども敵に勝へき圖のあるを待ちえて攻むるときにあたりては少勢を以て多勢を伐ちても其力あまりありて不足なること曾てなきなり故攻則有餘と云なりもし敵吾が守るとききの體の不足なるやうなるを見て悔りて來り攻むるときは忽にこれを挫くこと其力あまりあるなり此二句上の段の不可勝守也可勝者攻也と云を承けて下の文の意を引起せるなり古來の註には皆吾力いまだ足らざる所あるゆへに固く守て敵を攻めず吾力あまりあるに至て敵を攻て是に勝つことなりと云へり其時は本文を守るときは則足らざればなり攻るときは則餘りあればなりとよむべし名將は萬全の勝ちに非ればみだりに戦はざる意に叶ひて面白き説なり

れとも攻るを主にして説きたる説にて攻ることならぬゆへせんかたもなく守ること云ころになるなり攻守の二事は一つとして棄つべからざるにかく云ときは其義欠る所あり孫子が本意に非るべしといひ、一齊は吾所以守者則以力不足。且守以待之也。攻則以力有餘遂決以攻之也。と副文して居る。之れを見るときは徂徠以外の者は皆な一致の見解を下だして居るといふべきであるが。予は之れに對しては徂徠に與するものである。徂徠と同感である。何となれば、徂徠以外の者のいふところに由れば文義の前後を通ずる能はず、即ち一貫せざるの嫌ひあるではないか、徂徠の炯眼なる之れを能く玩味せるに似たり、彼の見は妥當の見であつて、又た古文を熟讀するものに取つて大なる戒めとなつて居るやうに思はれる。一齊の如きは元來無識の者にて何によらず自個の見解とては甚だ少ないのであるが、孫子副證は殊に然りである。しかも徂徠より見れば彼れは後世の者である故若しも異見を立つることを好まざるか或は支那人の餘睡を嘗むるを好まざる

無識すや徂徠と見を隔らすべきである。然るに之れを爲さざるは固ら無識にして名を爲せるに過ぎざるがためのみ。又た九天九地といふところに於て大分異議がある。曹公は因山川邱陵之固者。藏於九地之下。因天時之便者。動於九天之上。といひ、杜佑は善守備者。務因其山川之阻。邱陵之固。使不知所攻。言其深密。藏於九地之下。善攻者務因天時地利水火之變。使敵不知所備。言其雷震發動。若於九天之上也。といひ李筌は天一遁甲經曰九天之上。可三以陳兵。九地之下。可三以伏藏。常以直符加時干。後一所臨宮爲九天。後二所臨宮爲九地。地者靜而利。藏。天者運而利。動。故魏武不明於遁。以九地爲山川。九天爲天時也。夫以天一太一之遁幽微。知而用之。故全也。經云。知三避。五。魁然獨處。能知三五。橫行天下。以此法出。不拘諸咎。則其義也。といひ杜牧は守者稍聲滅跡。幽比鬼神在於地下。不可得而見之。攻者勢迅聲烈。疾若雷電。如來天上。不可得而備也。九者高深藏之極。といひ陣暉は

者三月。寅功曹爲九天之上。申傳送爲九地之下。夏三月。午勝先爲九天之上。子神后爲九地之下。秋三月。申傳送爲九天之上。寅功曹爲九地之下。冬三月。子神后爲九天之上。午勝先爲九地之下也。といひ梅堯臣は九地言深不可知。九天言高不可測。蓋守備密。而攻取迅也。といひ、王哲は守者爲未見之利。當潛藏其形。沈靜幽然。不使敵人窺測之也。攻者爲見之利。當高遠神速。乘其不意。懼敵人覺我。而爲之備也。九者極言之耳。といひ、何氏は九地九天。言其源微。といふて尉繚子を引證して居る。張預も亦た曰く藏於九地之下。喻幽而不可知也。動於九天之上。喻來而不可備也。といふて尉繚子を引いて居る。一齊も王哲の潛藏に由つて居るが徂徠は善く守るとは城をかため陣を取り備を立て、居れど敵何ほごに思ふても是を攻ることあたはず攻むへき方便を失ひ攻めても利を得ざるを善く守る者と云なり云々又た他の底にかくるゝとは敵の目に見えぬことなり敵の目に見えぬとは隱形の術に非

らず我守るところを敵に知らせぬとなり云々又た動於九天上とは是を喻へにし  
て敵の手のとどかぬ處を九天の上と云ふ云々とて古來の説を排斥して居る。之れ  
を見るに此の處亦た徂徠の説を最も可なりとすべしだ。此の外に不敗之地云々に  
付いても異説あれども、是れも徂徠の解を穩當とする

\* \* \* \* \*

又た曰く孫武が軍形に於ける論旨を事實に見るときは古來の戰爭に甚だ少くない  
英のウエルリントンが絶代の名將大ナポレオンをウオトルローに一敗地に塗れさ  
したのは云ふまでもなく軍形の宜敷を得た爲めであつた。實に當日の彼の戰爭振  
りは九地に隠れ九天に動いた。之れに反してナポレオンの方は號令甚だ行はれず  
毎にウエルリントンに一籌を輸して居つた。果して然らばウエルリントンはナポ  
レオンよりも名將かといふに決してさうでない。到底ナポレオンには匹敵すべき  
ものでない。けれどもウエルリントンは毎に機先を制して進むだ。故に彼れは勝



前既に不敗の地に立つて居たものである。孫武の所謂先づ勝つて而後に戦を求めたものである。之れに反して我が關ヶ原役を回顧すれば、石田三成は智將である然れども當時尙ほ彼れを重からしむるものがなかつた。彼れは常に文官となつて武將とは密接せざるが故に武將は彼れを輕むじて居つた。そこで大谷刑部の如きは口を極めて戦争の不利を説いて彼れを諫め、彼れのきかざるを見て止むなく友誼にはだされて彼れに與みしたが、其時刑部は石田が總大將となることを是れ又た止めて、老毛利をして總大將たらしめむとした。石田も伶俐者であるから、之れを聽るして、老毛利に請ふた。然るに老毛利は豊家の非運と石田の人望薄きを豫知して、此の戦に總大將たることを避けた。彼れ毛利の避けつゝも尙ほ豊家に與みしたるは名分を重むじてゐあつた。故に子孫の計を思ふて胸中二心を抱き自個は秀頼を守護すると稱して大阪に在り、其の子をして關ヶ原に遣はし、しかも容易に戦はしめず、徧へに形勢を觀望しての上にせしむるやうにした。故に其の

子は戦はずして去つた。右の有様故石田は最初より已むなく總大將となつて指麾して居たが、刑部が案の如くに號令は行はれず。おまけに秀秋といふ卑劣なる裏斬り者を出して散々に敗北した。是れを軍形の上から見れば彼の西軍の位置は孫武の所謂不敗の地に居つたもので、勝たなければならぬ道理であるのだ。けれども、孫武の道を修めて法を保つの用意が石田に出来なかつた爲めと今一つは裏斬を出した爲に敗北した。積水を千仞の谿に決するが如き地位に在りながら、一朝法の保たれずして其の形を失ふたのは千載の恨事である。

風無三正形。附之於天。變而爲蛇。其意漸允。風能鼓動。萬物驚焉。  
 蛇能圍繞。三軍懼焉。 握奇經

### 兵勢第五

軍形既に備はれば今度は、之れに次ぐものは兵勢である。兵勢とは、兵を行くには勢といふものが肝腎である。孟軻が聖人と雖も勢に乗するに如かずといふてある位で、物事にして動いて勢の附随し來たらぬものはない。勢既に附随すること明かなれば、之れに乗するは策の得たるものとして何事によらず當然の方法である。しかも勢といふものは、常に倍數を以て進退する、進む時も倍數、退くときも倍數である。故に一度勢が加はれば、勢が勢を生むで、其の力は非常である。是の勢に乗することを孫武は説き明かすむとして此の篇を書いたものだ。

分數は隊伍の編制

孫子曰凡治衆如治寡分數是也。

孫武いはむに、總べて多數を使用するときにあたりて其の多勢が宛も小勢であつて

使用するに極めて便利のやうに多勢を使用する方法といへば是れはいふまでもなく隊伍の編制である。隊伍を編制しておけば各隊長に命令を傳達することが出來て、自ら手を動かす、足を動かすに困難ならざるやうに自由自在に使用することが出来る。若しも此の編制がなかつたならば、五人や十人は總司令官一人で使用が出来るけれども、千人、萬人となつては、とても之れに一々命令したり號令をかけたりにて手足の如くに使用することが出來ぬ。故に隊伍の編制がなくてはならぬ。

衆如、寡形、名是也。

多數の兵員をして戰闘せしむること、あたかも少數の士卒をして戰闘せしむるやうに、命令を自由自在にして之れを兵員に知らしめて戰闘さすのは、今日でいへば電話や喇叭や信號旗等である。

三軍之衆可使必受敵而無敗者奇正是也。

大軍勢へ敵を引き受けて戰はせ、そして屹度之れに敗北しないやうにさすのは、正

形名は隊伍の編制を見るべし

奇正は正兵と奇兵

々堂々と正面よりかゝるところの兵と變に應じて側面より攻撃するところの兵と  
にわけておいて開戦することである

礮は鐵石

兵之所加如以礮投卵者虛實是也。

さて士卒が加はつて戦闘するに當たり、其の戦闘の勢があたかも堅い鐵石を以て脆  
い鳥卵に投げつけるやうに、造作もない仕方をするのは、虚實を心得てすることだ  
ある。虚實といふのは、虚は空しきもので、敵のすきあるにたとへ、實は満ちて居  
るもので味方のすきなきにたとへいふのである。空しくしてすきある敵を討つに  
満ちてすきな味方の軍勢を以てするときは、鐵石で鳥卵を破壊するやうなものだ。  
凡戦者以正合爲奇勝。

總べて戦争といふものは、正兵とて正面攻撃の堂々たる部隊を以て對抗會戦せしめ、  
戦闘酣なるころ、奇兵とて側面攻撃の新手を出たして敵をして不意に驚かしめ、そ  
して其の敵の壊亂するところに乘じて必死と戦ふて勝つものである。

故善出奇者無窮如天地。不竭如江河。

それであるから、奇兵を使用する其の方法たるものは、千變萬化の妙用があつて、  
あたかも天地の無窮なるが如くに其方法が無窮で、大江河流の其の水の涸れること  
なきやうに方法が不斷に流れ出て来る。少しも不自由、不足を感ぜぬものだ。

四時は春  
夏秋冬

終而復始日月是也。死而復生四時是也。

尙ほたとへて其の奇正の千變萬化の妙用をいふならば、朝夕東から出て西に入るの  
は、大空にかゝれる日月である。植物生物が一度は必ず死ぬけれども、直に又た生  
まれて来て、生まれては死し、死しては生まれして、すこしの間も、植物生物の絶  
ゆることがないのは、天地間に於ける春夏秋冬の妙用である。奇正の妙用の絶えず  
竭きざるものは、此の日月、四時のやうなもので、誠に驚くべきものだ。

聲不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>五。五<sub>レ</sub>聲之變不可<sub>レ</sub>勝聽也。色不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>五。五色之變不可<sub>レ</sub>勝  
觀也。味不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>五。五味之變不可<sub>レ</sub>勝嘗也。戰勢不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>奇正。奇

五聲は宮  
商角徵羽  
の五色は青  
黄赤白黒  
の五色

正之變不可勝窮也

正之變不可勝窮也

音調といふものは、宮商角徵羽の五音に過ぎないが、之れが錯雜して變化するに至りては種々雜多の音が出て一々彼の音は何、此の音は何と區別して聴くことが出来るものではない。色といふものは、青黄赤白黒の五色であるが、之れが混交して變化するに至りては、一々彼の色は何、此の色は何と區別して見ることが出来るものではない。味も鹹苦酸辛甘の五味であるけれども其の五味が混和して變化すると種々の味となりて一々彼の味は何、此の味は何と區別して嘗めて味ふことが出来ないのである。これと同じで戰爭に於ける勢といふものは、奇兵と正兵との二ツに由つて生ずるのであるけれども、其の奇正の二ツが戰場の如何に由つて種々に變化して顯はるゝ故に一々之れを區別して彼の勢は奇兵から出た勢であるとか、此の勢は正兵から出た勢であるとかを判斷して研究することが出来るものではない。

奇正相生 如循環之無端 孰能窮之哉

臨に奇兵と正兵とが、相ひ呼むで相應じ、相ひ呼むで相答へ、神出鬼没の動きをなすときは、最初の正兵が戰爭酣なるころはひに奇兵が出れば、正兵は一寸、手を引きて、其の奇兵が正兵の態度となり、又た奇兵が正兵の態度で戦ひ居る間に正兵が押しかくれば、其の正兵は奇兵の態度となり、變化自在の活動を爲す故に彼れを奇とし、此れを正とするの區別は出来ない、丁度輪の圓るくして其の端が何處にあるかを知ることが出来ないやうに、正、奇を生み、奇、正を出だし、暫時も休止するところを知らずである。それであるから、此の實戰場に於ける其の奇正の作用は誰れとて之れを研究して判斷することの出来るものでない。況むや戰闘に熱狂せる敵方に於てをや。

激水之疾 至於漂石者勢也 驚鳥之疾 至於毀折者節也

高い處から落つるとか、岩石に衝突するとかして流れる水は其の勢あたかも怒れるが如くにして、其の迅速なることを非常で、軟い質のものでありながら、硬くして重

疾は速なる鳥は驚

いどころの石をば浮かせて流がすが、斯様になるのは、勢といふもので、奇兵と正兵が變化自在に活動するところの勢は斯くなくてはならぬ。斯くあるべきものだ。又た鷹や鷲や總べて小鳥乃至小獸を捕ふる類の鳥の活動の迅速なることも驚くべきもので、一たび飛びかゝるや勢を以て敵手を打ちくちいてしまふ程で必ず捕へねばおかぬが、其の迅速に捕ふる間にも、チャンときまつた節度といふものがあつて、此の節度を失はぬ。節度といふのは、何であるかといふに、小鳥乃至小獸が草木の間に潛伏して居る處を見ても決して之れに飛びかゝらず、其の敵手の飛び或は走らむとするまで待つて居て、飛び或は走らむとしかゝつた處を睨つて飛びかゝる、是れ敵手の勢を利用するものである。角力を取つても四ツに組めば双方必ずツツと仕かゝるのを待つて居て、仕かゝつた處につけこむで其の敵手の勢を利用して投げ倒はす。節度といふもの斯様なものである。戦争に當りて敵の仕かけぬ中に此の方より杜かくれば敵は其の用意をする。そこで奇兵の如きは殊に此の秘術を要するのであ

敵は迅速なるを知縮す

是故善戰者。其勢險。其節短。

斯様な譯であるから、上手に戦ふ名將は、其の戦ひに勢をつくること迅速にして其の節度をはかることもなるべく短縮して、攻撃に都合のよい程度をはかつて、無益に士卒を勞らし無駄に銃丸を投下せぬやうにする。

勢如彊弩節如發機。

勢といふものは、大弓を引張るやうなもので、節といふものは、其の矢をはなつやうなものである、弓を張つたときは、其の弓と弦との間に力がこもりて、其の力が將に勢を出さむとして勢をたくはへて居る。一たびはなせば其の勢は迅速にして所謂岩をも徹さねばやまぬ。此の岩をも徹さねば已まぬやうな勢をつくりておいて、之れを節度に由つておこなう。其の節度は即ち前にいふ通りの矢をはなつ時機である。餘りに遠くに居てもよろしからず餘り近くに居てもよろしからず。矢の力が勢

は由つて増大して行く距離を見斗らふの必要がある。是れは弓取りの皆な承知するところである。

104

紛<sub>レ</sub>紛<sub>レ</sub>紜<sub>レ</sub>紜<sub>レ</sub>亂<sub>レ</sub>亂<sub>レ</sub>而不可<sub>レ</sub>亂<sub>レ</sub>也。渾<sub>レ</sub>渾<sub>レ</sub>沌<sub>レ</sub>沌<sub>レ</sub>形<sub>レ</sub>圓<sub>レ</sub>而不可<sub>レ</sub>敗<sub>レ</sub>也。

勢と節とを以て戦へば、紛紜して入り亂れて何れが敵やら味方やら、見分けもつかぬほどにござたくして闘ふて居ても、勢あり、節あつて、其の迅速と其の手加減とで、闘ふて居る故に、敵が之れを亂たらさうとしてもなかくに亂れない。又た渾沌として圓石が轉するやうに戦ふて居ても、之れを捕へて之れを敗らうとしてもなかくに敗れない。要は勢と節とに在るのである。

亂<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>。怯<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>勇<sub>レ</sub>。弱<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>強<sub>レ</sub>。

勢と節とを知つたならば、茲に更に知らなければならぬことがある。それは、治亂勇怯、強弱である。是等のものは、名將が心得て居らぬと持續するものでない。それで治の中より何時の間にか、亂が生まれ出で、勇の中より何時の間にか怯が生れ

出で、強の中より何時の間にか弱が生れ出で、取りかへしがつかなくなる。是れ即ち虚といふもので、すぎである。勢と節とを知得したるものは、此の虚に乗ずるの心得がなくではならぬ。又た此の虚を敵にこしらへさするやうに仕かけねばならぬ。仕かけて出来なければ、其の機會を待たねばならぬ。

治<sub>レ</sub>亂<sub>レ</sub>數<sub>レ</sub>也。勇<sub>レ</sub>怯<sub>レ</sub>勢<sub>レ</sub>也。強<sub>レ</sub>弱<sub>レ</sub>形<sub>レ</sub>也。

治亂といふものは、前に説いた處の分數といふもので、如何様にもなる。總司令官の心掛一つで亂を生せぬやうにしやうと思へば分數に心掛けて其の注意を怠らねば大丈夫である。勇怯といふものも、勢に由つて如何様にもなる。勢が弱ければ勇なるものも自然に怯となり、勢が強ければ、怯なるものも自然に勇となるのである。強弱といふものも亦た軍形の如何に由るもので、之れを前に述べたる通りに敵にさどられぬところの軍形をつくつて居れば弱も強となり、之れに反してさどられるやうな拙劣なる軍形を以てするときには強も遂には弱とならねばならぬやうな結果となる

のである。

故善動敵者形之敵必從之。予之敵必取之。以利動之以本待之。

それであるから、機会をつくることの上手な名將は即ち敵をして誘ひ出すことの上手なものは、吾れに於て先づ敵がかうしておけば、此の處必ずすべきがあるのであらうと思ふて、攻撃して来るやうに弱味を形にして見せると敵は必ず此の計路に乗つて来る。そこで其の時は此處をば敗けたやうにして北げると、敵は得たりとして之れを占領する。是れぞ敵に取つては利益といふものである。それでかやうに利益を見せておびき出して、そして勝つべき所以の根本の道理たる、機会といふものを待つて、之れを攻むるのである。

故善戰者求之於勢。不責之於人。

それゆゑに上手に戦争する良將は、勝利を勢ひにもとめて、得ることにつとめ、其の場合に當りては、其の責任を部下に對して殆んど度外視して、求めることをしな

い。いかに弱卒でも一たび勢を得て必勝の算が立てば、必ず普通以上のはたらきをするようになる。たとへせぬとて、勢があれば之れを補ふのであるから、此時に格別人を求めないのである。

故能擇人而任之。任勢者其戰人也。如轉木石。木石之性。

安則靜。危則動。方則止。圓則行。

それであるから、良將は氣を付けて、其の將卒の役目々に適した者を選び、其の役目の者の動きに由つて勢が生まれて来るやうにして、生まれたる其の勢を銘々に荷はすのである。敵を動かすに當たりては敵に利益を與ふるの必要ある故に、攻め來つて其の地を占領するならば、之れを與ふる爲めにわざと陣取つて居ること故其の士卒は何にも屈強の者を選抜して此の任に當たらする必要がない、弱卒で澤山である。又た眞の弱卒でなければ、敵將は之れを看破して却つて裏をかくの恐れがある。そこで名將となれば斯かる秘計を其の士卒に訓示せず其の陣を大切に

守らねばならぬやうに命令して戦はず、之れをば勢を荷はすといふものだ。勢を荷はしたる一部のものである。此の他にもそれ／＼に役目がある故、其れに勢を荷はせである。之れをば人を撰ぶといふのである。彼の人に秘計を訓示して其れに責任を負はするが如きは極めて平凡で、名將のすることでない。勢を荷はする名將が、其の部下を戦はすることは、あたかも木や石を轉ばすやうな調子である。木や石の性質といふものは、平かな處におけば、ジツとして居り、斜な地におけば轉つてジツとしておらぬ。又た其の木石が四角であれば大低の處ではジツと止まつており、圓るければ、ジツとしておらず／＼と轉びまはるのである。名將は士卒に勢を荷はするを、此の木石に荷はするやうにする。

故善戰人之勢如轉圓石於千仞之山者勢也。

それであるから、上手に戦争をさする名將の、號令に由つてなれる處の勢といふものは自由自在、變化百出で、其の妙用があたかも圓い石を千尋もある山の絶頂から

ころ／＼とまろばしておとすやうなもので、下るに従つて勢が勢を生むで、あたる者は粉碎して落ちねは已まぬ勢となる。是れが以上に述べた處の兵勢といふものを一言にして盡くしたものである。

尾池氏曰く、終而復始日月是也。死而復生四時是也。の下句の復を魏武註本、開宗本、副詮本には更と書いてあるが、十家註本國字解本には復と書いてあるので、予は後者に與みして、復の字にしておいた。蓋し字義穩當に見られるからである。又た以利動之以本待之の本の字は國字解本、十家註本等には卒と書いてあるが、魏武註本、開宗本、副詮本には本と書いてあつて、但徠も卒と書きながら、本が眞個で卒は恐らく後人の誤寫に由るであらうといふておる位で、本の字でなくては孫武の深意徹底せざるやう思はれるから、予は本の字に従つた。此の篇に就いても各節に異説粉々たるものあれど要するに古來の註、其の淺薄の見によれるもので、茲に指摘して駁撃するの價値もないから見合はすことにした。但たし



二二二  
徂從はなかくに妥當の見解を下した處が少くない。讀者よろしく國字解本をも一讀すべし

\* \* \* \* \*  
又た曰く孫武が斯の篇は軍形篇と異曲同工で其の文章は軍形に勝ること遙に遠しといふべきか、其の比喩の極めて明瞭なるものに由りて勢を説示し、しかも文に波瀾あり、頓挫あり、結構十分の作である。本篇の主眼とするところ奇正の二字に在り。往昔、信長が淺井を討伐した時に、秀吉は長政の強敵を挫くに此の奇正を巧みに使つた。正兵を以て戰ふて正兵を避けさしては、奇兵を左右より出だし奇兵を避けさしては正兵を出だし、奇、正となり、正、奇となり、變化自在に戰つて、淺井の勢を滅茶々々にしてしまつた。今日は武器が古と異なるが故に戰術も大に變化したれども、奇正の精神を用ふることは、變はりがない。是れは永遠に變はらぬ。戰爭といふものがなくなるまでは、變はるものでない。しかし此の

奇正も勢によることを忘れてはならぬ。孫武即ち口を極めて勢を説いたのである勢あつて、始めて奇正を用ふるに足るもので勢がなくては、如何とも爲し難い。

正兵貴<sup>ハ</sup>先<sup>ヲ</sup>。奇兵貴<sup>ハ</sup>後<sup>ヲ</sup>。或先<sup>ニ</sup>或後<sup>ニ</sup>。制<sup>シ</sup>敵者<sup>ナリ</sup>也。 尉 繚 子

虚實第六

曹公の脱

虚は空しく實は盈てるもので、實は強く、虚は弱い。此の強弱を、敵にもなさしめ、味方にもさすることの出来ることを説いて、總大將たるものは此の虚實を按配し敵に勝たなければならぬ。といふことを明かしたのを虚實第六とする。奇正は最も虚實を要することであるから兵勢の次に斯篇あるもので孫武の親切見るべきである。

處は居  
伏は逃  
超は行

孫子曰凡先處戰地而待敵者佚。後處戰地而趨戰者勞。

孫武申すに、總て戰爭するに當たりて、敵より先きに戰ふべき戰場に行いてそこに居るものは、諸般の準備が安々と出来るから、敵の來るを待つにも、聊か安心である。安心して戰ふことが出来る。あはてるやうなへまをすることがない。敵を待つといふても敵が攻撃して來るのを待ち受けるばかりをいふのでない。敵も同じく其の戰

場に行軍して來るのを待ち受けるの意味である。先きに處る者は右の譯だが、之れに反して後から行いて、陣取りやら、何かと諸般の準備をしてイザと戰ふものは其の準備に忙殺されて、大に士卒の疲勞を見ねばならぬ。そこで此の場合に先きなると後なると其の損益に多大の差を見るのである。

致は至

故善戰者。致人而不致於人。

それであるから、上手に戰爭する總司令官となれば、先づ敵を至らすこと、即ち自分の方で先に戰場に處つて、敵に後から來らすやうにして、決して如何なる場合でも、敵の方から、自分を至らすやうなことにされるやうな手後れなことをせぬ。

能使敵人自至者利之也。能使敵人不日至者害之也。

上手に敵兵をして、自然に此處へ來るやうにさすのは、それは敵兵に利益を與へるからである。敵兵が占領したいと思ふ處を能と取らすやうにしておくからである。

第二本 孫子 虚實第六

それから又た之れと反對に敵兵をして來さすまいと思ふ處へは、斷じて來さぬやうにする。どうしてするかといへば、前以て之れを防いで、敵兵に害を與へるからである。

故敵佚能勞之。飽能飢之。安能動之。

右のやうに上手に我が兵を使ひ、敵の兵を動かすものであるならば、それだけ出來るのであるから、若しも敵が安穩の地位に居つて、健全であらうとも、上手に此の敵兵を誘引して疲勞さす。奔命につかれさす。又た充分に糧食があつて、不自由を感せず、皆な食に飽いて居る敵兵をも、忽ちにして其の敵兵が自ら飢渴に陥るやうにさす。又た敵兵が堅固に守備して容易に動かす。安心して時機の至るを待つて居るのをも、之れを誘引して盲動さなければやまぬ。

出其所必趨。趨其所不意。

また敵が屹度出で、戦ふべき場所へ出兵して、戦はせておいて、そこで勝つのが目

的でなく、其の裏をかくて、他の目的の方面に別動隊を差し向けて敵の不意に乘じて占領して勝利を博する。

行千里而不勞者。行於無人之地也。

たとへば、出兵して其の兵が千里もある遠い道を行軍しても、少しも疲れぬといふものは、それは道に戦ふ敵がないから、此の方では只だ行軍するばかり故、つかれぬのである。それと同じで、茲に敵の不意に出て勝たうとするものは、必ず敵が要害の地をたのみにして、士卒を以て備をせず、士卒は却つて此の方で屹度出で、戦ふ場所と目指して出兵した方へ派遣してしまつて、少しも兵を備へず、備へたりとあるかなきかの兵で、唯だ一に要害をたよりにして安心して居る處へ、此の方で乗り込むのであるから、無人の地を行くやうなもので、易々と之れを占領してしまふ。少しも占領するに當りて疲勞を感じない。

攻而必取者。攻其所不守也。守而必固者。守其所不攻也。

無人の地を行くが如くにして、容易く敵の備なき處を伐つて之れを取る故。攻めて  
 屹度占領し得るといふものは、取りも直さず、敵の要害などを恃みて居らない處を  
 攻むるからで、此の理をば反對にして今度は自分の方に見るときは自分の方で守つ  
 て居て屹度堅固に在るといふものは、敵の攻撃し得ない處を守つて居るからである。  
 是れは地の利にも據るけれども、敵のやうに地の利ばかりを恃みにせず、軍形を巧  
 みにして、敵を容易く近けぬやうにして居るからである。  
 故善攻者敵不知其所守。善守者敵不知其所攻。

それであるから、上手に攻撃する者に對しては、敵は自個の城塞或は要塞をば守る  
 方法を知ることが出来ない。さうしてよいか思慮が着かすして途惑ひをする。又た  
 上手に守備する者に對しては敵は自分で此の方の城塞乃至要塞を攻撃する方法を發  
 見することが出来ず、是れにも亦た途惑ひをするものだ。

微乎微乎。至於無形。神乎神乎。至於無聲。

微妙であるかよ微妙であるかよ。敵が攻撃せむとしても、何處より攻撃すべきか其  
 の方法をだに發見することの出来ぬやうに隱密に軍形をつくつて居ることは誠に微  
 妙なものであるぞよ。神速なるかよ神速なるかよ。一たび吾れより攻撃するに當た  
 りては無人の地を行くが如く、敵の備無きに乗じて何時の間にか、進撃して、占  
 領する、其の仕方は誠に神速なるぞよ。

故能爲敵之司命。

それであるから、名將の戦争は、上手とも上手であつて、自國の民の吉凶禍福を司  
 る星となれるばかりでなく、敵の上にも司命星となつて敵を殺活自在にする。  
 進而不可禦者衝其虛也。退而不可追者速而不可及也。

名將となれば戦争が上手で進撃しても敵が之れを防禦することの出来ぬことがある  
 が、それは敵が守備を怠つて居るところを突破するからである。此處は最早引き擧  
 げ時ぞと見たらば、是れも敵の氣附かぬ間に引き擧げるから、敵は之れを追撃して

かゝる用意がなくて、呆氣にとられて居ることになる總じて不意に出るから、徒だ  
止だ呆氣にとられるばかりである。

垣は塙石  
澁は堀

故我欲戰。敵雖高壘深溝。不得<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>我戰者。攻其所必救也。  
我不欲戰。雖畫地而守之。敵不得<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>我戰者。乖其所之也。

それであるから、我れの方に於て、戦はふと望むたら最後、敵が城塞或は要塞に於  
て其の塙や石垣を高くし、堀を深くして、金城湯地にして堅固に守備して出で來ら  
ざることもあるとも、必ず出で、戦はなければならぬやうにして見せる。それといふ  
のは、敵があるそこを攻撃されては打ち棄て、おかれぬといふて屹度出で、救ひをな  
す大切な場處を攻撃するからである。之れと反對に我れに於て戦ふまいと思ふたら  
最後、我れの方で單に繩張り丈して、敵が攻めて來たら、手もなく攻め入ることの  
出來るやうな、つまらない守備をして居ても、決して攻め入らせない。戦ひをし  
か  
けさせないやうにすることが出來る。それといふのも、敵が攻めて來やうと思ふ方

面へは何時も來させないやうにする。攻め來る時がないやうにするからである。

故形人而我無形則我專而敵分。我專爲一敵分爲十。是以十攻其  
一也。則我衆而敵寡。

それゆゑに敵に種々の方面に於て軍形を見せて、其の實我れの方では八方の軍形は  
皆な虚で、眞個の處は兵を一つにかためて居る故八方の軍形は敵に見せる爲めで我  
れの方では其の軍形は無いのである。無いときは即ち我の兵力は一方に集中して居  
る。然るに此の場合に於ける敵の態度を見てあれば、敵は我れの八方の軍形を見て  
八方に其の兵力を配分することになる。そこで敵の兵力は散して、我れの集中せる  
一大兵力とは大に強弱に於て相違が生じて來る。我れは集中すれば一大兵力となる  
に敵の方では分散して十となれる次第であるが、是れは十の分散したる弱兵を以て  
一の集中したる強兵を攻撃することになるので、そこで我れの方では人數が多くな  
り、敵の方では人數が少くなるわけである。

能以衆擊寡者則吾之所與戰者約矣。

上に説いたる處のやうな遣り口を上手にして、集中せる一大兵力で分散せる小數の敵兵を攻撃するのは、即ち我れの方に取つて敵と戦闘する所以の大切なかなめである。此處のかなめを忘れてはならぬ。

吾所與戰之地不可知。不可知則敵所備者多。敵所備者多則吾所與戰者寡矣。

此の方で軍形を上手につくつておくは軍形が見えぬから、敵の方では、彼處此處へと我れの爲めに兵を配置するから、其の實際は我れと何處で戦ふべきか其の場所を知らないのである。既に敵に於て此處彼處に氣をくばつて兵を配置して眞に戦ふの場處の何處であるかを知ることの出来ない時は、敵は其の兵の配置の場處を多くする多方面に備ふるやうにする。多方面に備へたならば、其れ丈一個處一個處の兵力が減じて少なくなつて居る。備の場處が少なければ、兵力は其の部分部分に多くな

るかほりに、備の場處が多ければ其の部分々々に於て少くなるのは當然である。それであるから配置の場處が多ければ我れの方が戦ふ場處へ出でたる時、敵の方では其の兵力が減少して居る。我れは集中して大勢であるのに、彼は分散して小勢である際に戦闘開始となるわけである。

故備前則後寡。備後則前寡。備左則右寡。備右則左寡。無所不備則無所不寡。寡者備人者也。衆者使人備己者也。

それであるから、練りかへしくいふやうであるが、敵が前の方に備をするときは後の方の備の人數が少くなり、後の方へ備へるときは、前の方の人數が少くなり左に備へば右が減り、右に備へば左が減る。それから彼處にも此處にも備へない處のないぐあひにすれば、自然多いといふの處がなく、皆なくそれづくに手分をしておるから、何れも我れの集中して居る方から見れば、其の人數の少ない手分の方は虚といふもので敵の缺點で亦た敗ける證據となつて居るのである。之れを約め

ていへば斯く敵が寡くなるのは、即ち敵が我れに分配して備へるからで、亦た我れの衆いのは敵に我れの方の諸處へ分配して備へさするからである。

故知戰之地。知戰之日。則可千里而會戰。

我れの方は集中し、敵の方へは我れに分配するやうにしかけておけば、それがたぬに此の方では戦闘の場所は何處、戦闘の日は何日とチャンと前以て之れを知つて胸中に疊むである。既に胸中に疊むでおれば、遠い千里の先のことをも知ることが出来る。出来て、千里の先でも會合して、戦闘することが出来る。

不知戰地。不知戰日。則左不能救右。右不能救左。前不能救後。後不能救前。而况遠者數十里。近者數里乎。以吾度之。越人之兵雖多。亦奚益於勝敗哉。

敵兵を分散させることを知つて居るものは、大抵戦ひの地と戦の日を先見するものであるが、若しも分散させること丈知つて、戦の場處や戦の日限を豫め知り之れを

胸中に疊むことの出来ない總司令官であつたならば、憚むべし、其の總司令官はたとへ前後左右を完全に守備して居ても、右の方へ敵軍が大勢で押し寄せた場合は左の兵を以て此の右の方を救ひ出すことが出来ない。左の方に來たときも右の方は出來ない、前の方に來たときも後の方は出來ない。後の方に來たときも、前の方は出來ない。そこで、さやうな總司令官は、まして遠方數十里の地に兵を出して居つたときとか、近在數里の地に兵を出して居つたときとかの場合に、之れが攻められて險呑にならうとも、之れを救ひ出すことが出来ない。自分の手元にある前後左右でさへ、其の一方をも救ふことの出来ないものが、まして此の手元を離れて居るものをどうして救へやうぞ。決して救へるものでない。是れ一を知つてまだ二を知らざる大將と云はなければならぬ。孫武自らが、之れを忖度して見るに、自分の今居る呉の國の敵たる越の國の兵が、たとへドンナに多人數であつたとて、越の國の兵は上にいふところの一を知つてまだ二を知らないものであるから、今自分が其の局に

當りて、彼れ越兵を引受けて對戰したなら、ナニ越兵の多いといふことは勝ち敗けの數に損益しない。多いといふばかりで問題にならぬ。

故曰勝可爲也。敵雖衆可使無闘。

それである故孫武は斷言する。即ち勝つことは、機會を待つより外に詮すべなきものなれども、此の機會をこしらへてゆくべき手腕のある總司令官ならば、勝つことは何時でも爲すことが出来るのである、敵がドンナに多勢であるとも、及向はざるに敗けささうと思ふたら、及向はさすに敗けさすことが出来る。

故策之而知得失之計、作之而知動靜之理、形之而知死生之地、角之而知有餘不足之處。

それであるから上に述べたやうにするには、先づ戰爭前に敵情を審察してそれから策略を稽へて、そしてかやうにすれば利するところがある。このやうにすれば損するところがある。といふ其の計畫を立てるを知り。それから敵にしわけて見て、其

筈ははか  
るこころ  
角は觸

の動くか、靜かにして居るかの様子から見て、動くなれば動きの理由、靜かにして居るならば、靜かなる理由を知り、悉々動いて戰爭することになれば、其の敵に對して上に云ふところの軍形を以て敵を欺き、そして死地と生地との境を能く吞み込みて死地に在つては、我れは之れを生地にかへ、生地になつては、勿論敵を速に敗けさすやうにすることを知り。それから又た敵に觸れ接して、そしてかねて云ひしところの此の方が攻むれば兵が餘り有つて強く、敵の方から攻めて來て此の方が守れば敵の方が兵の足らないで敗けるといふ、そのことを知らなければならぬ。是れは即ち軍形の如何に決することである。上手に軍形をやれば、我れの方では敵の方で見て實とするところを必ず虚にして居り。敵の方で敵自身が虚にして居るところに對して必ず實を以てあたる。それゆゑに有餘不足の處を知つてそして勝つことが出来る。

故形兵之極至於無形。無形則深間不能窺。智者不能謀。因

深間は深  
く入りこ  
める間者



形而措勝於衆。衆不能知。人皆知我所以勝之形。而莫知吾所以制勝之形。

一三八

それゆゑに士卒を案配して軍形をつくるの至極といふものは、形無きに至つて、其の至極といふべきものである。無形といふのは数々いふたやうに敵に窺ひ知られぬ形をつくることで、全然軍形のないことをいふのではない。虚實の自然に應ずるやうに總司令官の胸中が常に形であるやうにするから、敵も味方もこれを知ることが出来ない。之れを無形の極といふ。そこで無形の極になると深く入り込むで居る敵の間者も之れを窺ひ知ることが出来ず。敵の方の智恵ある名將も之れに對して謀を運らして應ずることが出来ない。靈妙な軍形になると、其の軍形に由つて勝利の計畫を味方の軍勢にそれ／＼配置しておくゆゑ味方の士卒は唯々として命令に従ふばかりで、果して勝つことはドコの計畫に在るのであらうか、それが薩張り味方の士卒も知ることが出来ぬ。味方の士卒が大將のすることを知らぬ位だから、敵の方で

窺ひ知ることが出来ぬ筈はない。さやうな美鑑であるから、又た味方の士卒は皆我軍が勝利を博する所以の軍形をば、ハ、ア新様にしたから勝つたのだと知るを得るやうであるけれども、一步を進めて、我が軍が勝利を敵に先ちてこしらへて行く、其無形の形を知り得ないのである。常に總司令官の胸中に無形の形があるのであるから、勝利を制する其の無形の形を知ることの出来ないのも道理で士卒の知るのはイツも其の結果を知るのである。是れ即ち先知と後覺の相違である。

故其戰勝不復。而應形於無窮。

それであるから、名將といふものは同じことを二度しない。其の都度都度に戦争の仕振りを更へて行く、そこで味方の士卒にも尙ほ更らわらない。わかるの時がない。誠に敵の軍形を見て其の軍形に對して千變萬化窮まりなき手段を以て應ずるのである。

夫兵形象水。水之形避高而趨下。兵之形避實而擊虛。水因

地而制流。兵因敵而制勝。

此に上に云ふたところのことを言葉を変更してたとへて云ふて見やうなら。軍形といふのは、丁度水の形のやうなもので、此の水に其の形を象つてゆくものである。見たまへ、水といふものゝ形容は高い方へのぼることを避けて、卑い方へ下たるの形容をして居るのであらう。高い方へのぼるのは困難で卑い方へ下るのは容易であるから、其の性質を備へた水は、矢張り自然に卑い方へ下るやうな形容に出来て居るのである。戦争の當事者も其水と同じで、勝つのが目的で花々しく戦ふのが目的でないから、なるべく勝ち易いやうにするの性質であるゆゑ、其軍形をば敵が實を以て居る方の戦ひにくく、勝ちにくい方を避けて、虚のある方の勝ち易い方へゆく軍形をこしらへて居るのである。誠に水といふものは、其の土地々々の都合を見て平坦起伏、何れになりとも應じて、卑い方へと卑い方を選むで下だつて、其目的たる流れるといふことをばこしらへてゆく。軍勢も水と同じやうに其の敵々の都合を

見て、其の攻略の難易に由つて、之れに應じてそして戦ひ易い方へと戦ひ易い方を選むで其目的とする勝利と云ふことをば、こしらへてゆくのである。

故兵無常勢。水無常形。能因敵變化而取勝者謂之神。

それであるから軍勢には、常の勢と云ふて、さまざまの備はない。もしさまざまの備があつたならば、此の備が、あてはまらぬところの出来てくるものであるゆゑ、さやうなものはない、但だ大將の胸中に無形にして疊まれてある。水も其通り常の形といふがない。常の形があつたら、土地の都合に應じて流れてゆくことが出来ない。軍勢も水も目的に向つて動く作用は同じである。そこで、之れを上手にして敵々の都合に由つて、之れに應じてかはりて戦ひ易い方にゆいて、勝利を博する名將をば、名けて神妙な名將といふのである。

故五行無常勝。四時無常位。日有短。長。月有死。生。

それであるから、茲にたとへを引いて本篇を結ばうならば、木火土金水は各々長す

五行は木  
火土金水

を處があつて、何時もどこにも勝つものさままつておらぬ。四時の春夏秋冬もそれ  
 で何時も春とか何時も夏とかと其の位置を保つて居ることは出来ない。太陽でも其  
 の照す時間が夏は長いが、冬は短いといふ工合で常住、長いとか短いとかで止まつ  
 て居らぬ。月でも死生といふて、盈ちたり缺けたりして常住しておらぬ。そこで戰  
 争も計畫やら、戦術やら、皆なく其の時と其の處と其の大將との相違に由つて千  
 變萬化して、一定の型にはめたやうな軍形といふものがない。天地間の現象でさへ  
 も、一定して保たれないのだから、人間のすることに形があつて、其の形で何時も  
 目的を達せられやう道理がない。但だ無窮に應ずる無形の形を胸中に疊むで居る名  
 將のみが、常に勝利を博するのである。

尾池氏曰く虚實の一篇は孫子全篇の神髓であつて、其の旨は頗る深遠にして、常  
 人の窺ひ知ること能はざるものがある。文章も甚だ用意周到の筆致であるが、後  
 人より見れば又た解釋を異にする少からず、そこで種々に解されて居るが見る人

の程度に應じ得らるゝやうに見える。宛も論語が見る人の程度に應ずるやうの應  
 じかたに見られるのである。されば智慮淺き者之れを用ひるとも容なく、深き者  
 用ふれば萬全の計ありといふもので、兵家の一日も講讀工夫を怠るべからざる名  
 文であらう歟。唐太宗は之れを讀んで、朕諸々の兵書を觀たるが孫武に出づるも  
 のは無かりき、孫武十三篇に於ては虚實に出づるものは無きなりと言ふて居る。  
 古今既に此の虚實に對して定論ありた

\* \* \* \* \*

又曰く。虚實の妙用は神なるかな、微なるかなで、能く之れを用ふれば、戦はざ  
 るも、勝既に決せるものである。無人の地を行くといふは卑近なたとへであるが  
 古今虚實を運用する者は皆な斯の如しである。支那に於て三國分立の末期に、其  
 の蜀漢の亡ぼされたるあとを見るに、魏の鍾會といふが劍閣の本道から、攻め入  
 りたるを蜀の姜維は、こりや大變と此の方へ兵を向けて、本城たる蜀の都の成都



後は直

するところの軍争といふものより六ヶ敷いものはないのである。

軍争之難者。以迂爲直。以患爲利。故迂其塗而誘之以利。後人發先人至。此知迂直之計者也。

軍争の困難なる仕事であるといふことは、迂回したる遠路を眞直なる近路として、行いて敵から攻められるところの危険を避けて、利益を得なければならぬ。それであるから其の仕方をいふならば、自分の行いて利益しやうと思ふ方の道はこゝであるぞと態と迂回したる方へ兵を派して、敵を欺いて此の迂回したる方の道へおびき出し、そして其の實此の方では其の前に間道の方から目的地に達して占領或は獲得を恣にして来る。是れが敵よりも後れて發程してそして敵よりも前に到着するといふもので。斯様にするを迂直の計畫を知つて居る名將といふのだ。

故軍争爲利。軍争爲危。

それであるから、軍争といふものを、利益ありとなし、又た危険なりとなす、その

軍争といふことを十分に呑み込むで、上手に之れを計畫することが出来るならば利益であるけれども、若しも之れを知らないでしやうものならば、大變な過失をして、爲に危険に陥ることがある。そこでよしあしといふべきもので、要するに人を得ると得ないとで決する問題である。

舉軍而争利則不及。委軍而争利則輜重捐。

尙ほ深く考へねばならぬことがある。軍争をするにも、たとへば軍勢のこらす、こぞつて進發して目的地に目的を達するの利益を争ふてかゝるときは、何分大勢であるから行動が自由ならずして、敵よりは遅れて進して馬鹿を見なければならぬことになる。又た總軍勢中後方部隊即ち輜重隊を棄ておいて進發して利益を争へば、敵は輜重隊を襲撃して糧食などを取つてしまふから、輜重は空くすたれて、軍隊一同は飢渴に陥らねばならぬ。

百里は日  
本の十七  
里は強  
勁は強  
委積は貯

是故卷甲而趨日夜不處倍道兼行百里而爭利則擒三將軍。勁者先。疲者後。其法十一而至。五十里而爭利則蹶上將軍。其法半至二十里而爭利則三分之一至。是故軍無輜重則亡。無糧食則亡。無委積則亡。

往昔は甲  
冑にして  
今日の軍  
服は其の  
重量の故  
今日の軍  
服は其の  
重量の故  
べし。見  
る。見  
る。見  
る。

かやうなわけであるから。其の目的地に達せむと行軍するに當たり、軍服を脱いで、夜晝なしに走つて、豫ねてきまれる行軍里程をば、此の時にかぎつて倍にして即ち一倍を兼ねて行いで、十七里のところ、利益を争奪すれば、總軍の各指揮官位は敵に捕虜にされてしまふ、それといふのは、強い者は先に行つてしまひ、疲れて弱つた者は後に残こされてしまふからである。そして其の残されるものと先に行つてしまふものとの割合を見れば、まあ十分の九は残こされ、十分の一が先に行くことになるのである。僅に十分の一しか行かぬとすれば、十分の一で敵の多数と戦

ふことになるから、先きについた指揮官などは捕虜にされるのも當然であらう。それから若しも其の行程が其の半分即ち八九里であつて、そしてそこで利益を争奪すると司令官位は亦た捕虜にならずとも、險呑な目にあはされる。そして其の馳せつけた人数はと見れば總軍の半分であつて、他の半分は取り残こされてしまふて居る。更に行程八九里の半分の四五里であつて、其處で利益の争奪にかゝれば、即ち總軍勢の三分の二は行つて居るけれども、尙ほ三分の一は取り残こされて居るのだ。此の三分の一は何であるかと云へば、主として後方部隊である。輜重隊である。後方部隊は歩兵や騎兵の如くに急速に行軍が出来ぬ。規律正しき時間に由つて各、申合せて行軍しなければ、輜重隊は追ひついて行くことが出来ず、必ず取りのこされる、取り残こされたならば先に行つた軍勢に軍器や糧食を供給することが出来ず、供給することが出来ぬと先手の者は戦闘が出来ない。戦闘が出来ないばかりでなく、取り残こされた輜重隊は非戦闘員が多いから、敵の襲撃にあふて滅茶々にされ且つ

軍器糧食は奪ひ取られてしまふて、茲に總軍の敗績となるのである。かやうなわけゆゑ、輜重即ち軍器を運ぶものがなければ其の軍は亡び、糧食を運ぶものがなく又た取られてしまふては其の軍は亡び、委積即ち相當の糧食の貯蔵がなければ亡びてしまふといふのである。

故不知諸侯之謀者。不能豫交。不知山林險阻沮澤之形者。不能行軍。不用鄉道者。不能得地利。故兵以詐立。以利動。以分合。為變者也。

險阻は坑塹の地、高は水、沮澤は水、險阻は坑塹の地、高は水、沮澤は水、險阻は坑塹の地、高は水、沮澤は水、

それであるから、戦争をするに當つて、隣國が如何なる態度であるか、表面は自分の方へ厚情あるやうに見せて裏面では敵國と往來して、一步をあやまらば、敵國と同盟して自分の方を攻撃しやしまいかなど左様なことを充分に取調べておかなければならぬこの隣國の謀計を知らないでは戦争前にもあらかじめ交を訂して探報をな

ておくことが出来ない。又た敵國の山川、森林、坑塹乃至土地の高低等の形勢を知らないものは、行軍することが出来ない。行く先きくの土地の道案内者として、其の土地の者を使用しないものは、其の地の利益あるところを獲得することが出来ない。それゆゑに、戦争といふものは、詐術を以て敵を制するといふ考の上に計畫を立て、行かなければならぬ。又た氣の利きたることで活動し、それから、隊を合

せ、或は分ちして、奇正の妙を巧みにし、變化自在にするものである。  
故其疾如風。其徐如林。侵掠如火。不動如山。難知如陰。動如雷霆。掠鄉分衆。廓地分利。懸權而動。先知迂直之計者勝。此軍爭之法也。

それゆゑ、軍勢の進撃、退却すること、終始形なくして、往來、しかも其の迅速なること測り知らぬ彼の風のやうにあり、軍勢の進軍するときの規律が整然として徐々なることは、動いて居るか動いて居らぬか、少しも散亂せぬので鳥渡見ても

知られぬやうに、一かたまりになつて、彼の林を見るやうにあり、それから、敵地に  
 侵掠するときは、焰々として燃えて通るやうにあたるを幸に侵掠して、何者も抵抗す  
 ることをゆるさぬ彼の猛火のやうにあり、それから、一たび陣を立て、動かぬこと  
 さは、泰山がすむつて居るやうにあり、又た軍形を以て敵に知られぬやうにしたと  
 きには、暗いところで物を見て見えないやうにあり、そして若しも敵に應戦し或は  
 進撃するときは、雷がなつて、天地が震動するやうな勢にありたい。斯くなくては  
 戦争は勝てるものでない。それから又た敵地の郷村に物資を侵掠するには、人数を  
 案配して、敵に備へて、侵掠をなし、敵方の土地を侵略して自個の領分とするには、  
 其の地の利を見て、之れを侵略して之れを守るのであるが、總べて兼ねて兼ねく言へ  
 るやうに、かかることをするには、我れと敵との間に生ずる虚實をはかりにかける  
 やうに心にかけて、輕重を判断して行動しなければならぬ。誠に敵に先ちて迂直の  
 計を知つて之れを行ふものは、必勝の算を得るのである。是れが軍争の法といふも

軍政は軍  
 金鼓はか  
 れたい  
 火鼓は松  
 明の火と  
 太鼓

のだ。

軍政曰、言不相聞、故爲金鼓。視不相見、故爲旌旗。夫金鼓旌旗者、  
 所以一人之耳目也。人既專一，即勇者不得獨進，怯者不得獨退。  
 此用衆法也。故夜戰多火鼓，晝戰多旌旗，所以變人之耳目也。

古代の軍書には、大軍に對して號令をかけても、隔々まで言葉が達せぬから、即ち  
 自然聞こえないので、かねやたい、こを作つて之れで合言葉にする、又た視ることも  
 なかく見にくいから、はたを作つて之れで合圖をする。誠にかねやたい、こやはた  
 といふものは、軍隊の耳や目を一にしてしまふ理由のものである。多數のものが一  
 のかねなり、たいこなり、はたなりを觀たり、聞いたりしては、其の合圖や合言葉  
 に由つて、觀るところ、聞くところを一にしてしまふ。軍勢が觀たり、聞いたりす  
 る合圖や合言葉で、心を專一にすれば、勇むで強い者も、其の號令を違つて、自分  
 勝手に進むで行くことが出來ず、怯れて臆病なる者も自分勝手に退却することが出



来ないのである。是れが軍隊を操縦する方法である。それであるから、此の法式にしたがつて、敵を欺く爲めに、夜間の戦争には、松明の火や、太鼓を多くし、晝間の戦争には旗旗を多くして、我が軍勢は非常なる多人数で頗る旺盛であるのを、之れを巧みに操縦して居るやうに敵に見せかける、是れが敵の耳目を變らして、案外の大軍なるに驚くやうにさするといふものだ。今日は金鼓を用ひず旗旗もあまり用ひず、號令は總べて指揮官之れを口で傳へ。傳へ得ざるときは、喇叭を用ひ。總司令官より命令傳達の場合は電信、電話又は傳令使であるが、戰場に於ける掛け引きには彼の精神は無論應用して居るのである。

故三軍可奪氣。將軍可奪心。

それであるから、大軍は先づ敵の氣勢を奪ふて敵を慮させてしまふことが出来る。又たそれより先に總司令官は敵將の心術を奪ひ取つて、初手から手も足も出ぬやうにしてしまふことが出来るから、此れを心掛けてよろしく應變の計に出でなければ

ならぬ。氣といふものは、心より發するものであるから、若しも心を奪つてしまへば、自然氣は奪ふ必要もなくなるのである、それであるから總司令官は敵將の心を奪ひ取ることを忘れてはならぬ。

讀はかま  
びすし

是故朝氣銳。晝氣惰。暮氣歸。故善用兵者避其銳氣。擊其惰歸。此治氣者也。以治待亂。以靜待譁。此治心者也。以近待遠。以佚待勞。以飽待饑。此治力者也。無邀正正之旗。勿擊堂堂之陣。此治變者也。

かゝるわけを茲に更めていへば、一體人の氣持といふものは誰れによらず、朝が一番心のすがしくして、何事でもなさうといふ、元氣が盈ち満ちて、従つて氣が張つて鋭い。戰場に在る將校下士卒などは殊に此の氣持が見える。それから、晝ごろになると氣候にも關係するところがあるけれども、概して朝の間に盈ち満ちて

居た元氣が段々に減つて、なまけてくる。これは物の道理上自然のことで、盈ちたるものは、必ず缺けるはあたりまへであるから、盈ち満ちたる元氣が減ると、其の銳いところがとれてしまふて、なまけることになるのであるが、それから更に晩方になると其氣持が一變してしまふて、モウ今日は日も暮れたから、家に歸つて休息したい、又た明日もあることだといふ風になつて、戰場に在る者は、家には歸へられぬぞ陣にかへるなり、野宿をするなり、何れとも宿を取つて、休息したい氣持になる。かくなりてはなまけは絶頂に達して、なまけといふものも見られなくなつてしまふのであるから、最早其の日の仕事が出来ぬやうになるのである。それであるから、上手に士卒を使用する名將は、敵に銳氣ある間をよけて、敵がなまけたり、やめたくなつたりして居るときに、其の氣持につけこむで攻撃する。此の時は人の氣持は皆な同じで、敵がなまけたり、やめたりする氣持になつて居るときは、味方も亦たそのとほりではなくてはならぬのであるけれども、名將は此の時に當たりて、士

卒を憤激させて朝の氣持同様に兵士の氣を引き立て、から攻撃してかゝるのである。こゝが名將と愚將との違ふところであるが、かく朝の氣を用るずに、其の氣を張らさずに晝のなまけさきも、なまけさせず、いゝ加減にさしておいて晩方までは中庸不斷の氣持でおらしめ、そして其の中庸不斷の氣に一鞭を加へて朝の氣の銳いところと同じにして敵を撃つの方を探るのを、之れをば氣を治むるといふのである。治むるは即ち國家を治むるといふと同じ意味にすることである。そして其治めて居るところの氣持で敵の心が日中から晩方にかけて、亂れてくることを待て居て攻撃するのである。安靜にして敵が騒々しくなつてくるを待つて居て攻撃するのである。騒々しくなるのを待つのは、亂れるのを待つのであり、安靜にするのは治むることをいふので、何れも言葉が違ふて意味が同じであるが、かくするのを、心を治むるといふので、氣を治むるよりは亦た一段工夫あるべきである。心を治め、氣を治めることがわかるとそれから又た今一つ勢力を治めることを忘れてはならぬ。前に度

をいふておいたことであるけれども、茲にあらためていふが、敵よりも前に戰場に出で、便利なる土地に陣なり城塞なりをかまへ、また迂直の計で近路して、敵には遠まはりをさせなどして、兎に角近くて速い事をなして敵の遠くて遅いのを待つことになし、準備を速に片付けて氣樂にして居つて敵の後れて来て藻掻きあせつて疲勞するのを待つことになし、又た糧食を充分にして、常に不自由を感せず飽いて居り、敵が糧食に缺乏して饑渴に迫まるを待つて居ることなどを力を治むるといふのである。氣を治め、心を治め、力を治めることが出来る。更に又た敵が正しい旗色をして居ると即ち正しい氣味が見えたときは之を攻撃してはならぬ、なるべくさやうの時は、其の鋭鋒を避けて居らなければならぬ。それから堂々と陣を構へて居るときは攻撃してはならぬ。正々の旗色、堂々の陣構は何れも敵に實あつて虚なく、満ちて隙がないのであるから、之れを撃つと兵法の極意たる虚を撃つといふ秘法にそむくことになる。かやうに實を避けて虚につくことに心がけることを稱して變を

治むるといふのである。變化自在の心術をおさめることである。

故用兵之法。高陵勿向。背丘勿逆。佯逃勿從。銳卒勿攻。餌兵勿食。歸師勿遏。圍師必闕。窮寇勿迫。此用兵之法也。

それで話がかわるが、總べて戦争の仕方は、高いところから、卑い方を攻むるのを良策としてあるのであるから、之れの反對に出で、卑いところから、高い小山のやうな陵の上に居る敵を攻むることは已むを得ない場合の外は、之れを見合はせなければならぬ、なるべく卑いところにおびき出すか出てくる時を待つがよい、尙ほ高陵に似たやうな小山の丘を背にして陣を取つて居る敵には亦た逆らはぬやうにするがよい。卑いところから攻むるの不利に陥るのみならず、敵は背には引かれぬものだから、そこをせんと一生懸命に戦ふので大に味方の兵力を損ふことになる戰場の懸引は前にもいふとほり、此の方でも、欺いてわざと逃げて見せることがあるが、敵にも此事が必ずあるので、其場合には之れに追従して所謂長追ひといふものをし

てはならぬ。長追ひをすると必ず後から伏兵が起つて攻めたてられ、伏兵が起ると前に逃げつゝある者も引きかへして攻めたてるので、茲に挾撃の計略にかゝることゝなるのだ。精力絶倫にして、銳氣満々たる士卒を攻撃してはならぬ。之れを攻撃すると此の方の士卒を損傷せねばならぬ。強敵を挫いて快とするは、快なれども、戦争の目的は、一部の強敵を挫くのが目的ではなく、大體の上に勝つのが目的である。徒らに味方を損傷して其の一部の強敵に勝つたからとて、戦争の目的には利せりとは云へぬ。餌兵といふて敵が我れを釣る爲に土地とか糧食とかを見て見ぬ振りして我れに取らることがある。さやうな時には、前以て之れを覺つて居て、之れを獲物として取つてはならぬ。敵兵が交代になるかナニかして引上げて本國に歸へらうとて其の途中に在るときは、之れに出會しても之れを止めて會戦してはならぬ。此の時の敵兵の心持といふものは、歸期を急いで居るから、之れを止めでもしやうものなら、死物狂ひになつて又向ふて來るゆる、味方が非常の損失をしなければなら

ぬのだ。又た敵を取り巻いたときは、四方を固めて寸歩も出ることの出来ぬやうにすると敵は死戦して血路を開かうとするから、味方に非常の損害を蒙る。それゆゑ三方を取り巻いて一方は必ず開けておいて、敵が敗けたら、北げるに便利なことにしておいてやらねばならぬ。必ず一方を闕ぐのは兵家の秘訣である。最早窮して行きところのない敵には、亦たせまつて打ちそれを捕らうとしてはよくない、たごへにも窮鼠却つて猫を噛むといふことがあるから、小勢と見えても窮せる敵にせまつてはならぬ。以上説くところは亦た用兵の法である。かへすゝもいふておくが戦争の目的は、敵國に勝つのであつて一部の強敵に勝つのが目的でないから、大に勝つて小には快を取らぬやうにしなければならぬ。芝居氣は名將の爲すべきことでない。

尾池氏曰く。斯篇は此れ變を治むる者也までは文理一貫して居るけれども、故に兵を用ふるの法以下は木に竹を接いだやうである。されば古來此の文に付いて議論

紛々で、歸するところを知らぬ。蓋し錯簡であらうといふが一致である。錯簡といふのは古は簡といふて竹を割つて其の表に鼠の牙とか、漆とかで書いたものであつて、其の簡はあたかも鑿劍道具の胴のやうに竹を編むでおいたものであるから、之れを編む糸を韋といふておるが、其の韋が切れて編目がほごけてしまふて後には何枚目の分であつたか知れないやうになつたのを、後人が推定で組み入れてそして紙に書き寫したゆゑ、組み入れごころを間違つて、従つて文章が間違つておるのを錯簡といふので、簡をあやまりまじへたといふことである。故用兵云々以下は古來錯簡だといふておるが、徂徠は「故用兵之法」の五字だけを衍字といひ其餘に對しては疑問をはさむておる。即ち末句の「此用兵之法也」の傍に此の一句は結語なり張賁劉寅が説に上の故用兵之法と云は衍文にて高陵勿向と云より是まで下の九變篇の文錯簡してこゝにあり九變篇の始めに合軍聚衆と云へる文の下へ入れ此結語の此用兵之法也と云六字を九變篇の絶地無留と云へる文の下へ入るへし

となり尙九變篇の内に衍文ありそれは九變篇の解に説けりさればこの本文の高陵勿向と窮寇勿迫と云々を九變の内の八つと見て九變篇の内の絶地無留と云を入れ九變の數を合せたる者あり總て古書の錯簡衍文明かに考へかたし張賁劉寅が説決して孫子か本意なるべしとも思はれずされとも此篇の故用兵之法と云より末はいかさまにも軍争の術にも非ず外の篇の錯簡と思はるゝなり章句讀を考へ正してたとひ古書の如くしたりとも書を講ずる用處にて今日兵を用る上には何の益もなきことなりまして高陵勿向と云より下は上下の文勢に拘はらず一句に一句の用處あれば錯簡衍文を考へ正さずとも弓箭の道是によりて益を得べきなりといふて居る。一齊は亦た故用兵以下。楊魁講意以爲九變篇之文脱簡。案數勿字。軍争緊要戒語。不<sub>ニ</sub>必<sub>ス</sub>爲<sub>ニ</sub>錯<sub>ト</sub>文<sub>ト</sub>。楊説勿<sub>レ</sub>從<sub>ト</sub>といふて居る。一齊の言は書を読むものにも似合はない言で取るに足らぬが、徂徠の言も餘り感服せぬ言である。文章には、結句を以て結論してゆくの結句を用るす開放してゆくの二様の文法はあれども、

此の文を結論と見ては無論見事に足らず、さりとて開放として甚だ關係の薄いものを持ち出して來て居るのであるから、文理整然句法森嚴なることを愛する孫子の文章としては受取りにくいのである。錯簡たることは最早動かすべからざるもので議論はないが然らば其錯簡は何れより來たれるかと云へば予も亦た感なき能はずで、直に張貴劉寅には左袒すること出來ない。さりとて徂徠の言の如く一句一句に其用處あること事實なれば今日は之れを續けて講解するにとめて、之れを削らず又た他篇に挿入もしないことにした。たとひ此の數句の由來を知り得られざるとも、孫子の神髓は得られぬといふことなし。それほど大切な文義を備へて居て他篇に之れを入れれば文理徹底を缺くといふほどのものでもない。かゝる詮索は何れ他日に爲さうと思つておるから、今は見合はさう。本文中故軍爭爲利軍爭爲危トといへるをば開宗直解七書本、副詮等には、下句の軍爭を衆爭としてあるが十家註本、國字解本等には軍爭としてある、予は軍爭を以て正しとするも

のである。曹公、杜佑等は文字のことに付いて論せず善なれば利とし、不善なれば危とすと説いておるが、賈林は我が軍先づ至つて其の便利の地を得れば則ち利となり、彼の敵先づ其の地に據り、我が三軍の衆、馳せ往いて之れと争へば敵は佚にして我は勞となる。危の道なりと説いておる。一齊は此の説を採つて副文して居る。徂徠に至りては、是は軍爭は大切なることわけを云へり迂直の計を知たる人これをする時は勝利となる迂直の計を知らざる人は是をする時危きことなりと云ふ意なり一本に軍爭爲利衆爭爲危とありて下の軍の字を衆の字に改めてあり因て講義に軍を分てするを軍爭と云ひ總軍のこらす赴くを衆爭と云敵と勝利の場を争て敵より先きに是を得んとするには人數を分ちて赴く時は手軽くして速なるゆへ利あり總軍残らず赴く時は人數多ければ路必遅きものにて遅き内には不意の變來るゆへ危しと云へり文義を以て云時は人數を分つて軍爭と云ひ人數を分けざるを衆爭と云ふと云へること心得かたし軍理を以て云時は一應聞ゆるやうなれども

軍争の極意ながらに人数を分ると分けぬはなきことなれば分ると分けぬにて利となり危きことなると云ふべからず故に此説信用しがたし云々尙ほ進むで喝破して講義直解共に古本を用ひず世間流布の誤りたる本に従て下の軍の字を衆の字に作りたるゆへ其義牽強附會になりたるなりといへるが、徂徠の識見見上ぐべしである。書を讀むものは眼光紙背に徹するを要すと云へるが、徒に讀過して註解を一に古人に由ると徂徠に笑はれるやうなことになる。故に自個の識見を發揮するまで精讀しなければ駄目である。

又た曰く。迂直之計といふのが軍争の極意で孫武は此の計を知らしめむとしたものであるが、其の計は當然なさるべからざるものなれども、今日の國際條規では孫武の言を許容せざる點がある。それは郷を掠むるには衆を分つといふの一句だ。孫武の時代は所謂敵の糧によるの時代で郷村の人民の物資を徴發否な劫掠する。

るが如きは當然のこととして居たものであるから、孫武も其の時代精神から趨出することが出来ないで、劫掠を當然として此に迂直の計の内に之れを説いて居るのである。故に今日の進歩せる道德及び國際條規より見れば、孫武の説は甚だ不都合な説なれども、さりとて今日の思想を以て孫武を責むるのはナト酷である。故に予は此の一點を以て全體の主意を害せないやうにせむことを讀者に注意する。

使<sub>レ</sub>智<sub>ヲ</sub>使<sub>レ</sub>勇<sub>ヲ</sub>使<sub>レ</sub>貧<sub>ヲ</sub>使<sub>レ</sub>愚<sub>ヲ</sub>。智者樂立<sub>ニ</sub>其功<sub>ヲ</sub>。勇者好<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>其志<sub>ヲ</sub>。貧者邀<sub>ニ</sub>其利<sub>ヲ</sub>。愚者不顧<sub>ニ</sub>其死<sub>ヲ</sub>。因<sub>ニ</sub>其至情<sub>ニ</sub>而用<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>。此軍之微權也。 三略

九變第八

臨機應變に事を處断して自在なることを變といふのであつて、九といふのは、此の變化自在の方略の澤山あることを云ふために九といふたので、九ツといふの意味でない。九ツ以上の數は一を加へて行くことになるので、數といふのは九を極度としてあるから、澤山の意味に九を用ゐること文の常例である。故に澤山にある變化自在の方略を茲に述べやうとて此の題を用ゐて下文を草したものだ。

孫子曰、凡用兵之法。將受命於君。合軍聚衆。圯地無舍。衢地合交。絕地無留。圍地則謀。死地則戰。塗有所不由。軍有所不擊。城有所不攻。地有所不爭。君命有所不受。

圯地は低  
地にして  
難に於て  
衢地は四  
衝の地は  
道に於て  
絶地は四  
圍の地は  
井の地は  
絶の地は  
李の地は  
孫の地は

孫武申すに、前に云へる通り用兵の法は、總司令官が上の命を受けて軍を編制し、軍屬を募集して、戦地に赴くのであるが戰場に向つては、四方が高くして中の低く

圯地は四  
方より取  
りまかれ  
る危険の  
地は、死  
に於ける  
が、此の  
出づるこ  
ろは、絶  
地は、

四方より攻撃さるゝに當たつて、四方の敵は上から攻撃するに此方では中に在つて上に向つて防戦するやうな處へ軍隊をといめてはならぬ。四通して三屬せる處即ち敵國外の他國との交通路となつて居るところでは、外交を巧みにして、他國の感情を害せず、我れに同情するやうに我が軍の方で交際を結むで通過しなければならぬ。井戸の水も牛馬に食はず秣もないところに滞留してはならぬ。四方から取りかこまれるやうな處に在つて若しも取りかこまれたときは奇謀を用ゐなければならぬ。逃げも走りも出來ず死ぬより外には術もない處で敵に攻められては、最早これまでと討死の覺悟で戦闘しなければならぬ。道であるからとて前後左右も見えないやうな道や狹隘にして歩行に困難なる道があれば、之れを便宜だからといふて通過してはならぬ。伏兵があつたり、不意打ちをされたとき戦闘のしにくい道路は注意して當然避くべきことである。敵を見つけたからとてそれでもかまはず攻撃してはならぬ。敵には前篇に於て説けるとほり、銳卒もあり、窮寇もあり、餌兵もあるから、



斯様なものに會へばうたぬといふのが兵家の常法ゆゑ、敵の種類をよく見定め  
てからにすることだ城塞乃至要塞にも攻撃してはならぬ城塞乃至要塞がある。それ  
は攻落に困難し、したがつて士卒を損傷すること多大にして又た長き時日を要する  
と見たるもの、或は攻落したりとて格別敵の大勢に影響しないもの或は抛擲してお  
けは敵自ら開城して去るところのものなどである。取れば非常に都合のよい土地で  
も、取りたりとて、之れを守ることの出来ないやうな土地は寧ろ之れに争ひをおこ  
さぬがよい。それから總司令官に肝腎なことが今一つある。それは天皇乃至大統領  
國王など、總べて上がする命令を受け取らないと云ふことである。是れは甚だ不忠  
のやうなれども兵家の常で、何處も同じくあるところのものである。總司令官には  
それ相當の権限を與へられてあるものであるから、一步を戰場に出だしては軍法に  
照らして、自個の権限内で臨機應變の處置を取り、これに對して、上があつては  
いかぬかうせよなど命令を下だすとも、それは自個の所信に合すれば別の話である

けれども、合せざるときは、斷乎として一切之れを拒絶し、権限を以て自個の信す  
るところで處斷するといふことである。これが總司令官たるもの、果決としてたく  
てはならぬものだ。これがないときは、士卒は命令、號令に遵はず、戦争は勝つべ  
き筈のものであつても敗けてしまふことになる。故に總司令官となる人は大に自重  
し、大に識見の涵養を要とする。

故將通於九變之利者知用兵矣。將不通於九變之利者雖知地  
形不能得地之利。治兵不知九變之術。雖知五利不能得人之  
用矣。

それであるから總司令官たるものにして上に説くところの九變に付いて其害を去つ  
て利することに通じて居るもの即ち知つて之れを應用することの出来るものは、兵  
を用ゐることを知つて居るものである。之れに反して九變の利に通じない愚將は、  
たとへ前篇に説けるところの地形といふものを知つて居るからとて、それだけの  
話で、地の利といふものは得ることが出来ない。地形を知るは地形を知ることぞ之

れを得ると得ざるとは、手腕に在ることゆゑ自ら別問題で、矢張り九變は通じて變化自在の動きの出来るものでなければ、得ることが出来ないものである。總司令官たるものにして、軍を統べてゆくに當たりて先づ九變の自在なる術に達して居ないと、敵にも味方にもあるところの各司令官たる大將連の固有する氣質の五つあつて、しかも其の氣質の頗る危険なるものであることを知り、之れを敵味方の上に見て、何れにも危険より避けて、利益に移るといふことの五利を知つて居るともそれはそれだけの話で、そればかりでは、將校士卒の役目役目の其の動きの利益ある結果を獲ることが出来ないものだ。

信は混  
信は伸

是故智者之慮必雜於利害。雜於利而務可信也。雜害而患可解也。  
かゝる次第であるから、智慧ある總司令官の思慮するときは乾度利のみを見ず害のみを見ず、利と害との両面をまじへて見て、之れに由つて分別する、そして分別がつけば、之れを實行する。實行すると即ち利益に禍害をまじへて見て差引の勘定を

して居るから、其の實行したる事業はズン／＼と伸びてゆく即ち進捗するのである。又た禍害の方には利益をまじへて見て、勘定して居るから、軍に當たりて、心配ごとやら、災難やら、不利益になることは差引かれて、患ふことは一切湯を以て氷を解いてゆくやうに解決してゆいて其の危険を免かれてしまふ。

是故屈諸侯者以害。役諸侯者以業。趨諸侯者以利。故用兵之法。無恃其不來。恃吾有以待也。無恃其不攻。恃吾有所不可攻也。

かゝるわけゆゑ、出兵しては、隣國をして我れに左袒せしめておくときにも、利害といふことをよく／＼知りて、之れを行ふ上に其の利害を示めしてなるほどと首肯せしめて來らしむるやうにしなければならぬが先づ左袒するため隣國を屈服させるには、利益を以て之れを誘ふばかりでなく、之れにまじゆるに禍害を以てしなければならぬ。禍害を示しておさぬと利益ばかりでは屈服し來らぬものである。又

隣國を我が下女下男を召便ふやうに使役するには、利とも害ともつかぬ業で以て使役すべしだ、それから隣國が我が味方となりて馳せ參するやうにするには、禍害を以ておとすばかりでなく利益をも示めて誘はなければならぬ。屈服させるには、利益に禍害をまじゆることを忘れず、馳せ參せしむるには禍害に利益をまじゆることを忘れないやうにし、使役するには、利益とも禍害ともつかぬわざで誘導する。利害に拘泥すべからざることには上に説けるところで明かであらうが、戦争の上にも、戦場の心掛に利害に拘泥すべからざることがある。通例は敵の寄せ來らざるに安心して居るはよろしくないからそこで其の安心は、我れの方で何時でも應戦し、或は攻撃する其の機會といふものを待つて居るところに在る安心でなければならぬと云ひ又た敵が我れを攻め來らざることには安心してはならぬ。それよりは、我れの方には、敵がたゞへ攻め來るとも我が微妙なる軍形を攻め取ることの出來ないやうになつて居ることに安心すべしであると云ひ、安心の仕方を常に敵の上へ考へ

てするのと我れの上に考へてするとのちがいを説いて居るが、これは全くの話で誠にその結果に其差千里を來たすことがあるのだ、敵の上に考へてするのは、敵に恃み敵に安心するので、そこに我れに虚が生じ、我れの上に考へてする時は我れに安心するので、そこに我れに實を生ずる、此の實は利で彼の虚は害である。かしなから此の虚實の利害といふものをば一方に拘泥せぬやうにしなければならぬと切言するのである。

愛民は愛兵のこと

故將有五危。必死可殺也。必生可虜也。忿速可侮也。廉潔可辱也。愛民可煩也。

かるがゆゑに、話がかはるが、尙ほ利害を他方面よりして説けば、大將は五ツの危険なる性質を以て居る。是れ即ち害であつて、名將は此の害をば敵に見るときは、此の害を以て我れを利するやうにする。そこで害が變じて利となるの道理となるのだ。必ず討死しやうと覺悟して戦ふ大將は殺すことが出来る。これを生擒にしやう

としても死を期して居るから戦ひが劇烈で決して生擒に出来るものでないがそのかはりに殺すことは出来るのである。殺せば即ち勝ちだ、又た早く殺さねばならぬ。命を惜むで生還を欲せる大將は、従つて戦闘振りが鈍いから、捕虜にすることが出来る。早く捕虜にすべきものだ。氣に驅られて短慮にして、直ぐいかる大將は、之れを侮るがよい、侮れば倍、いかり戦ふて敗績するものだ。かどたちてきれいに、且つ潔癖のある大將は、之れを辱むるがよい、かゝる大將は辱めらるゝと、何よりも不快に感じて、大に憤り戦ふが、既に此の憤り戦ふといふものは心が亂れて戦ふものであるから、侮られたる大將と同じ結果に出づることになるのである。士卒を愛する仁心厚き大將は、士卒の一人でも、敵に殺さすことをせず、直に之れに應援軍を發して之れを救助するといふ風であるから、此の弱點につけこむで、始終士卒を苦しめて、之れに應援することになし、其の煩ひに勞からざるやうにすべきである。煩勞して遂に煩勞に堪へざるに至らば、此の方の勝利勿論である。

凡此五者將過也。用兵之災也。覆軍殺將必以五危。不可之不可也。

總じて此の五危即ち上に説いたる五危といふものは、大將に在るところの氣質、五ツが五ツ皆まではある筈もなければ、聖人ならざる以上は一ツや二ツは、必ず持つて居るところの氣質で、是れは實に大將たるものゝ過失である。そこで、之れをば、用兵の上に於ける災難といふものだ。軍勢をひつくりかへし、大將を殺すことは必ず此の五ツの危険で以てするのだ此の五危といふものを審察しなければならぬ。これが敵に在りて、之れを敵の害とし、我れには之れを利として勝利を博すれば格別、若しも我れに在りて敵より之れを敵の利としてつけこまれては、我れは敗滅しなければならぬ。彼我の上に於て審察して、常に此の災難を轉じて、幸福としなければ名將とはいへぬ。それが出来ねば戦争をすることはならぬ。してはいけぬ。断じて爲すべからずだ。

吉田松陰曰。此篇必不備。強解者。有變其所。類而。其四。耳。

尾池氏曰く、斯の篇、脱簡甚だ多くして文理徹底しないやうに思はれる。古來頗る議論のあるところであるが、さうして張賁、祖逖等のいへるやうに、軍争篇の高陵無向以下を斯篇に入れるといふことはいかゞであらう。予は今之れを研究するの違なきまゝ、研究を他日に譲つて、其の句、其の句に付いて講じておいた。必ずしも前後に關係を持たせて連続させてはおかぬことにした。但し孫武が九變の意の大體に見ることの出来るのは勿論であるから、讀者其の全を食らず、遺珠を砂中に捨ふの心を以て讀みたまへ。

又た曰く、九變の主眼は五危に在り、五危は能く人情の微を穿つたものである。古來此の弱點につけこむで勝利を博したものが澤山ある。又たつけこまれたるに、つけこまれなかつたものもある。つけこむで勝つたものは、苻黃眉などである、孰裏といふもの、苻黃眉に侮られて急遽して戦死した。つけこまれなかつたもの

は、仲達である。孔明が仲達の容易に出で、戦はざるを見て、之れを急遽させてやらうと婦人の裝束を贈つて仲達を侮つたが、仲達はさる者、之れしきに急遽しない。是れつけこむだものは孔明でつけこまれなかつたものは仲達である。かゝる實例は其の五危の何れをも戦争史上に歷々として見る。讀者史を讀むにあたりて此の五危を忘るゝことなくば、勝敗の裏面に必ず之れあることに思ひあたるであらう。若し夫れ關ヶ原の一戦に家康指頭を咬むで急遽したにかゝはらず、三成之れを知らざりしが如きに至つては論の外だ。

兵以義舉而以智克。戰以順合而以奇勝。

何博士備論

行軍第九

行軍といふことは新聞雜誌にもあり、亦た世人の皆な云ふ處にして、小童も能く之れを知つて居ることだ。即ち軍隊が戦地に發程して其の陣を進むることである。往時は之れを陣押しといふて居た。此の篇は行軍の題下に陣を取るの用心、斥候の心得、士卒を使用するの心掛を説いたものである。

孫子曰、凡處軍相敵。

孫武申すに總べての場合に行軍して軍勢に陣をかまへさずするには、其の總司令官たるものは、敵に對して考へ、自分の軍勢の陣取るところを觀察してからの上のことにしなければならぬ。

絶山依谷。視生處高。戰降無登。此處山之軍也。

絶はわたるこゝろをみ

の意味は生は草木の意に見よ處は敵の意に見よ

今日は軍器は歩軍にして林中に陣をとりしを得たり

一たび出兵して、其の兵が戦地に達すれば先づ陣をかまへねばならぬが、其の地に達して其の前方に山があれば其の山の麓に陣をとりてはならぬ。それは甚だ危険である。敵は其の山の背面より押し登りて、頂上に來たり、その頂上より坂おろしに攻めくだることがあるかくては大敗をしなければならぬことになるからだ。そこでさる場合には必ず其の山をむかうへ越へてそして其中腹なり、麓なりよき處に陣をかまふべきである。さすれば地勢甚だよろしくして、近くは敵の來たることや、遠くは敵の陣どりの模様を見ることの利益もあるといふものだ。又た水あるところ、草ありといふは定論であるから、陣を取るには谷に沿ふをよしとするのである。それは水は水として陣に水の用あれば其の便を得るが、其の外に草があれば、馬糧の補ひになるといふものである。要するに草木の茂生せるところを見はからうて、そして其處の高いところへ、陣をかまへ、樹木に由つて陣形を隠晦し、諸々の草に由つて軍形に利したり、馬糧に得たりして、戦闘を開始すれば、上から下へくと戦

は山林の  
前にあれ  
ば其前に  
出でて陣  
取らるや  
取らるや  
なりけし  
るなり居

水は河川  
の意は川  
の上は川  
のほさり

ふべきである。敵をして上から戦はしめて、我れは上に登りくしつ、攻めるやう  
な不利なことをせぬやうにするをよしとするのである。是れが即ち山に據るの軍勢  
といふもので、陣かまへの第一だ。

絶水必遠水客絶水而來勿迎之於水内。令半渡而擊之。利。欲戰者  
無附水而迎客。視生處高。無迎水流。此處水上之軍也。

川をわたつて、陣をかまへる場合には、直ぐの川向ふに陣取つてはならぬ。屹度川  
から遠く離れたところに陣取るべしである。それは直ぐ川向ふに陣取ると敵が若し  
前から攻め來たらば後へ退く必要ありても退くことならず、川をわたり來たりて攻  
めらるゝことあらば、前に向つて敗北しなければならず、敗北せぬまでも、敵は攻  
め寄するばかりなるに、此の方は引くばかりになるの患がある故である。そこで屹  
度川から、遠くはなれて陣取つて戦闘の自由を得るやうにし、さてそれから、敵が  
川をわたつて攻め來たることがあつたならば、此の戦ひには注意を要する。敵が川

をわたらむとすると、此の方でも川中に這入つて、其の敵を迎へて戦ふてはな  
らぬ。川中で戦へば進退掛引自由ならず、甚だ不便で大に損傷をするの恐れがある  
から、之れをばせず、敵が半分ばかり此の方の岸上に着してしまひ、そしてまた  
半分は川中に在るといふありさまの時を見計らつて、突進して攻撃すれば、岸上にあ  
る半分では兵力が不足であるから、戦闘が十分ならず、川中にあるものは、退くに  
退かれず、進むには前の岸上に己れの味方が攻め立てられ居りてそこに上ることな  
らず、岸上の敵と川中の敵と相ひ共に困り、遂には此の氣勢に乗じたる此の方の氣勢  
は強きこと愈々強く、勇ましきこと倍々勇ましくして、とう／＼岸上の敵を撃ちと  
るやうに、川中に逐ひまくるやうにして、敵は共に川中に同志打ちみたやうな滑稽を演  
ずるあれば、將基だをしとなりて川中に溺れて滅亡するの有様となることがあるか  
ら、我れは之れに由りて大に利益するのである。戦闘を望む者は、前に川邊に陣取つ  
てはならぬと云ひたるやうに、川邊に出軍してはならぬ。川邊に出軍しては、敵と

戦ふときに進めば川中に這入るの不利あるゆゑ。さうしても後へくと退いて戦はねばならぬのである。引きつゝ戦ふといふことは決して策の得たるものでないから、水に附して即ち川のはどりに沿うて出て敵を迎へて戦ふてはならぬ。必ず多少川邊より離れて居らするやうにすべきものである。此の處に居らするにしても山に據ると同様に草木の茂生するところを見はからうて、しかも川邊は卑いものであるが中にも幾分でもそれよりは高い處を撰むでそこに居らするやうにし、そして尙ほ其の居らするところは川下でなく、川上であることの必要がある水の流れを上に見て居らするのは、出水に由つて難儀する憂があり、川下は高いところでも川上よりは卑いから濕氣に由つて病氣の患があり、何かにつけて障害があつて不利益するばかりであるものだ。是れをば川のはどりに據るところの軍勢といふもので陣かまへの第二である。

斥澤は海邊に云ふ

絶斥澤惟去無留 若交軍於斥澤之中 必依水草而背衆樹 此

處斥澤之軍也。

海邊とか湖邊とかをわたるには、たいくすみやかに其處をわたり去つて決して其處に留まることをしてはならぬ。それは海邊や湖邊には鹽分を含むだ濕氣があり、又た其處は砂地であるから歩行の自由に困難するので従つて戦闘でもするときは、活動の自由を缺いで頗る困却することゝなるからである。ゆゑに斯かる場處をば兵家は最も惡地として忌みさらふて居るのである。しかるに若し左様なところで不幸にも敵に遭遇することがあつて、其の海邊湖邊で交戦することになつたならば、それは已むを得ないことゝして、其の時は屹度其の近邊の川のある處、草木のある處を見はからうて其處にゆいて、陣かまへをなし、尙ほ其の陣かまへをするにも森林を背に負ふことにしなければならぬ。なせさやうにせねばならぬかといふに、海邊湖邊は砂地であるけれども注意して少しでも其處をはなれて川邊や草木のあるところを多らふといふと幾分地質が堅硬で従つて活動の自由が得られるからである。彼



平地は平  
易は坦々  
死は草  
木なき死  
地は草木  
あは生地

一七六  
のギョウしたる砂地は賊に戦闘に困難であるから難くすれば危険に陥るの恐れがあるものだ。ゆゑに幾分でも地質の堅硬なる處における必要がある。是れが海邊湖邊に據るところの軍勢で陣がまへの第三である。

平陸處易。右背高前死後生。此處平陸之軍也。

茫茫たる平地では、ひとしく平地と云ひながら、亦た操ぶにつれて其の間には、馳驅に便利な坦々たる地がないでもなからうから、其の坦々たる地を獲むで其處に陣をかまへ、それから又た幾ら平地でも多少の高い處のあるのもあらうから其處を右部にし且つ背部になるやうにし、草木のない死地といふ處をば前にして其の前で戦ふにやうにし、草木ある生地をば後にして其の後に敵のまはりて戦ふに不便にならうにすることを忘れてはならぬ。彼の高處を右部と背部にして居るなどは、銃砲を使用するに至極便利なもので、これは兵家の必ず知るところである。是れが平地に據る軍勢であつて、陣がまへの第四である。

黃帝は五  
帝の第一  
軒轅は四  
帝の第二  
方帝は四  
帝の第三

凡此四軍之利。黃帝之所以勝四帝也。

總べて上に説けるところの此の四軍勢の利益といふものは、決してないことをいふのではなくて、事實あつたことを云ふのである。それは上古に黃帝軒轅氏と云へる天子が出で、四方を征伐するに當たり、此の法を用ゐて多大の効を奏し其の成績が優勝であつたはれのものである。

凡軍好高而惡下。貴陽而賤陰。養生而處實。無百疾。是謂必勝。

總べて軍勢といふものは、其の陣取りをするに當たりて、かういふ用心をしなければならぬ。かういふ用心とは何であるかといふは、それは高い處を好みて、卑しいところを惡むやうにし、陽氣な處を貴むで陰氣なところを賤むやうにし、草木のある處に養ふて、常に實の處に居るやうにすること、善れが大切な用心といふもので

あつて斯くすると諸種の病氣がない。高いところを好みて卑くい處を惡む譯といふのは、高いところは敵情を觀察したり、敵を射撃したり、其の他坂おろしに戦ふの便利あるは勿論、高いところであるから、空氣もよし、濕氣もなく、爲に病兵の難を免かれるので、之れを好めといふのだ、其の反對の卑いところ、低地といふものは、觀察にも射撃にも一般戦闘にも不便なるばかりでなく、濕氣がはげしいから、病氣の患がある。又た陽氣を貴むで陰氣を賤しめといふのは、陽氣な處は東南に面して居つて、日あたりがよいから、空氣がよく、空氣がよいから、氣持がよく、冬あたゝかく夏涼しく、従つて病氣の恐れがないのであるが、之れとちがうて陰氣な方は西北に面しておるから、日当たりがわるくして空氣あしく、空氣あしければ、氣持もあしく、冬は寒くて夏は暑く、病兵の絶間がないことになる。又た草木に養ふて實に居れよといふのは、水ある處草木あり、草木あるところ水ありで、こゝに陣をかまへたならば、軍形をつくりて、出來たる軍形は樹林のお蔭で敵にさとられ

ず、草は馬糧の補ひになり、そして軍形を敵にさとられないときには、此の方はイッも虚を避けて實に居られるからのことである。全く草木に養ふて實におれば、水が不足であつたり、氣候の變化にあてられたり、なまげや不安から起るところのあらゆる病氣を將校下士卒軍屬から牛馬にまで見ることをすくなくするの利益がある。そこで百疾即ち軍隊に起るところのあらゆる病氣がないといふものだ。是をば屹度勝つ軍勢と斷定するのである。

丘陵。隄防必處其陽而右背之。此兵之利。地之助也。

丘陵とか隄防とかに居るときには、屹度其の東南に面した方に居つてそして其の丘陵とか隄防の高いところをば陣の右側と背中とするが肝腎である。是れは前に四軍に於て述べたところの道理に原くものであつて、かくすると軍勢の利益となり、又た地形の爲には、さやうにされたるが其の地形の手助けとなるものであるといふわけである。



